

「法華本門の眞理」を如何にして知らしむべきかといふ點にあつたのであるから、勢
 迹門の前十四品よりも、本門の後十四品に重きを置き、末法に於ける大法護持の方規
 を示された流通分を出立點とし、「法華經」を逆に讀んだのである。即ち迹門よりは本
 門、本門の中でも、先づ流通分から逆に壽量品に讀み上るといふ風で、此の本門の流
 通分なる不輕品が本で、折伏の主義がこゝに現はれ、之で壽量品顯本の目的を達せん
 とし、迹門は皆此の上の話しだと見るのである。迹門の中でも、流通分の勸持品は、
 不輕品と相照應してゐるので、不輕品は、過去の不輕菩薩に事よせて、末代「法華」
 護持の至難を示し、勸持品は、現に末代「法華」護持の容易ならざることを明したも
 のである。故に上人は前にも述べた如く「過去の不輕品は、今の勸持品で、今の勸持
 品は過去の不輕品、今の勸持品は、また未來の不輕品になるだらう、其の時には、日
 蓮は、即ち不輕菩薩たるべし。」と言はれて居るのである。勸持品と不輕品、迹門、本
 門の流通分、これ實に、上人が、末法「法華」流傳の規範として堅持した所で、上人

の折伏主義は全く之から出たものである。——上人の法華主義は、「法華經」の逆讀立
 教である。

日蓮は泣かねども涙ひまなし

末代惡世に、「法華」を弘通せんとするには、非常な迫害壓迫を受くるといふことは、
 確に勸持品に明示せらるゝ所である。「有諸無智人、惡口罵詈等及加刀杖者、我等皆
 當忍」とある。又「濁世惡比丘、不知佛方便、隨宜所說法、惡口而擧聲、數々見擯
 出、遠離於塔寺」ともある。日蓮上人は心獨り自ら以爲へらく、此の「法華經」所説
 の事實を、身に讀み得たるものは、我一人である。天台、傳教、如何に偉大でも、未
 だ末法弘布の此の大難を實驗せぬ。「開目鈔」には
 經に云、數々見擯出、云々。日蓮、法華經の故に、度々流されずば、數々の二字い
 かにせん。此の二字は、天台、傳教も未だ讀み給はず、况んや餘人をや。末法の始

めのしるし、恐怖惡世中の金言の合ふ故に、但日蓮一人、之を讀めり、云とある。

小松原の難では刀杖の厄に遭ひ、鎌倉では、將さに死罪に行はれんとし、伊東の流罪、佐渡の流罪、ア、まことに、數々見擧出ではないか。然し「爲レ説ニ是經ニ故ニ忍ニ此法難事ニ我不レ愛ニ身命ニ但惜ニ無上道」ニともあるから、佛の懸記にまかせて、安んじて、生命を捧ぐべしとは、實に上人の決心であつたのである。此の決心で、飽くまで世と闘ひ、此の眞理を弘めて、退かぬが、即ち不輕品の不輕菩薩のしごとである。どうせ末法に『法華經』を、從順に、多くの人の受け取らぬは、さまり切つたことである。さればかゝる時代に、『法華』の種を、多くの人の胸に種をつけやうとするには、どこまでも無理押しに強ひなければならぬ。これが不輕菩薩の慈悲である。名けて之を逆化といひ、せめては、逆縁を結んで、下ろした小さな一粒の種も、未來何時かは芽のめぐむ時を期するの外はない。逆化は未代弘法の慈悲である。強盛の下種は、惡世教化

の唯一手段である。『法華』の不輕菩薩は、其の規範を示された。：：日蓮上人の折伏主義は、全くこゝから出たもので、決して、怨恨憤怒の争闘ではない。上人にあつては、『法華』の命ずる所に随つて行ふ、末世弘法の慈悲行といふ、涙の激戦である。こゝは人の動もすると、上人に對する誤解の本となる所であらうと思ふ。現在の大難を、思ひつゞくるにも涙、未來の成佛を思つて喜ぶにも涙せきあへず。鳥と蟲とは鳴けども涙をちらず。日蓮は泣かぬとも、涙ひまなし。此の涙世間の事に非ず、但偏に法華經の故也。

とは、『諸法實相鈔』の文である。其の言、實に沈痛悲愴といふの外はない。

(六)

最後に日蓮上人の教義に就いて一言する。——上人の教義は、天台宗から脱化し來つたものである。天台と言へば、支那で開けた、三諦圓融、一念三千を説く、天台大師

の天台宗であることは言ふまでもない。然し傳教大師が日本に傳へられた天台宗は、多少支那の天台と趣きを異にして居る。それは純粹の天台といふよりも、非常に密教の加味せられたものであるからである。

叡山佛教の復古論

特に傳教大師以後、慈覺大師や、智證大師などいふ人々が、支那へ行つて専ら密教を學んで還つて來てからは、叡山の佛教は、殆ど密教化してしまつて、天台の本經たる、『法華經』は、却つて密教の本經たる、『大日經』以下のものとして取り扱はれる様になり、傳教大師の傳へた最初の面目は全く失はれたとも見れば見られることゝなつたのである。日蓮上人は、非常はこれを憤慨し、慈覺、智證を排斥し、傳教の昔は違らざるべからずといふことを主張したので、此の點から言へば、叡山佛教の復古論である。然し上人は、全然傳教所傳の智者流の天台と、其の説を一にして居るのではない。所

謂日蓮宗でいふ、台當兩家の教義には明に一大溝渠の混すべからざる境界線があるのである。……今之を詳細に述べることは容易でないが、畢竟同じ『法華經』を本としても、天台宗は述門に重きを置いて、理の一念三千を説くが、日蓮宗は、本門に重きを置いて、事の一念三千を説くといふのが、先づ根本の相違であらう。言葉を換へて言へば、理に重きを置くのが天台宗で、事に重きを置くのが日蓮宗である。

宗教系統

凡そ佛教には、精神に重きを置いて、「一切衆生悉有佛性」といふ立場から、心の本體を洗つて見れば、我々も元來佛なのであると、心即ち佛の説を立つる系統がある。これは、まア普通の大乗佛教の説で、天台宗は、此の立脚點から、一念三千といふとを立て、行く、これが理の一念三千である。此の議論では、現象界の一切の萬有は、實在の眞如の顯現であるとし、眞如を本とし、現象を末とする傾きがある。理本事末

とでもいはうか。さうして、此の理なる實在を、我々の心の奥に見出さうといふのである。ところが之に反對で、心と物、精神と肉體とは元來實在の二方面で固より二つのものではない、随つて、心が佛であると同じ様に肉體も其の儘佛である。肉體が佛であると共に、一切萬有は皆佛であるといふ、事の現象の方に立つて、其の説をなす所の系統は、全く前の天台宗など、立教の方面を同じくしないので、これは即ち密教の系統である。日蓮上人が事相に重きを置いて、事の一念三千を立てたのは、確に密教系統の影響を受けたものであることは決して疑ひがない。日蓮上人が曼荼羅を用ひられた。此等も日蓮宗と密教との關係を示して居るものだとも言はれないともない。が然しこれには色々議論もある、日蓮宗の方からは言ひ分もあるのであるから、姑らく之を措くとしても、日蓮上人の思想は密教の影響を受けて居ることは到底拒むことは出来ない。前にも言つた様に、上人出家の清澄山は、當時天台宗であつたらうといふのであるが、それにしても、上人最初の著述たる『戒體即身成佛義』の如きは、

全然密教的思想から成つて居るもので、其の五戒を事相論の如く適用し、事相論と『法華』の關係を説く所などは、明に後の上人の思想の源泉となつたものであると、上人の後の主張は、此の考の擴充したものであることは確に認められるのである。：『總在一念鈔』に「最初の一念展轉して色報をなす。是を以て、外に全く別に有るにあらず、心の全體が身體と成也。(中略)此の三千世間の法門は、我等が最初の一念に具足して、全く無二缺減。此一念、即色身となる故に、此身は全く三千具足の體也。是を一念三千の法門と云也。」とあるのは、即ち此の事の一念三千を説明したものである。然らば此の密教的影響を、どうして上人は受けられたかと言へば、言ふまでもなく、上人が後に非常に排斥した、叡山の密教、即ち台密から受けられたものである。唯從來の叡山佛敎は、『法華』の本經を密教の附屬の如くに取り扱つた、其の關係を轉倒して、『法華』を本とし、事相本義の説は、由來『法華經』の精神であるとして、密教思想を、『法華』の方法に取り込み、『法華』の本門開顯は、即ち壽量の一品で、此の

事相本義をこゝに立てるのだと定めたのである。

『法華經』に三種あり

全體『法華經』とは何であるか。日蓮上人の之に對する答は、『御書』によつて考へて見ると、三種の區別がある。其の一つは、『法華經』とは、八軸二十八品の、文字の『法華經』である。これは別に議論のない話である。第二は、『法華經』は天地萬有これ其の當體であるといふので、これは、先づ哲學的の言ひ方である。『當體義鈔』に、

問。妙法蓮華經者、其體何物乎。答。十界依正、即妙法蓮華經之當體也。

とあるのはこれである。第三には、同書に、

所詮、妙法蓮華當體者、信三法華經、日蓮弟子檀那等父母所生肉身是也。

とあるもので、此の「父母所生肉身」是れ『妙法蓮華經』の當體であるといふのが、即ち、弘法大師の所謂「父母所生身速證大覺位」と同じ思想であることは頗る見易い

話である。然るに之に「日蓮弟子檀那等」と制限を加へたのは何であるかと言へば、成程、十界の依正、天地萬有皆『法華經』の當體である以上は、我々の心身も、悉くこれ『法華經』の當體なることと言ふまでもないが、然しそれは理窟上の話で、實際の上からは、今日此のまゝ、我々の肉體が、決して佛とはなつて居ない。即ち「法華共同信者妙經體也」とある如く、此の身に、『法華』の『法華』たる所以のものが活現して來なければ、『妙法蓮華』の當體とは呼ばれないのである。即ち『法華』を信じ、我が身の『法華』と同化し、いや『法華』が我が肉身其のものである所以のものが、發揮したる所、これが『法華』と共同したる所で、かゝる人をば、日蓮が弟子檀那と呼んだのである。第二は理窟上の『法華』で、第三は、實際上の『法華』である。實際上の『法華』とは、口に「南無妙法蓮華經」を唱へるばかりではない。心に「南無妙法蓮華經」を唱へ、なほ手にも、足にも、全然父母所生の肉身に「南無妙法蓮華經」を唱へる人のことで、かゝる行者をば、之を三業受持の人とは呼ぶのである。——上人の教

義に就いては、之を詳に言ひ立てれば殆んど際限がない。今は上人の教義と、天台、眞言の關係と區別との上丈から見ての話に止むることにして置いて、あとは之を略することゝしやう。

不滅の身、偉人日蓮

文永十一年の五月に——幾多の大難を一身に受け、建長五年四月に、此の日蓮宗唱題の説を建立してより、凡そ二十一年間、身を『妙法蓮華經』に捧げて、苦戦惡闘、自ら上行、不輕を以て任したりし偉人日蓮は、身を鎌倉の中心より退け、靜に身延の山奥に隠れ、最早政府に強要して、鎌倉幕府保護の下に時めける、禪念佛と相争ふの態度を改め、其の門徒を策勵しつゝ、餘生を唱題聲裡に送り、弘安五年九月、身延を出で、池上宗仲の宅に……今の本門寺のある所に赴き、其の十月八日に六老僧——日照、日朝、日興、日向、日頂、日持——に、滅後『法華』弘通のことを遺告し、其の

十三日に、年六十一歳にして、七字の唱題を、池上丘上空吹く松の風に托し、長へに不滅の身を靈山の寶所に隠し、泊然として、常住の妙用、幻身一時終りを此の娑婆世界に告げられた。ア、是れ、我が、偉人日蓮上人の最後である。

道元禪師

(一)

最早十五年前の昔語りになつた。私が曹洞宗中學校の教師をして居つた時分、明治三十三年のことであつた。

承陽大師六百五十年忌

といふので、永平寺で大法要がある、就ては我が中學校の學生も、引率して參拜さしたらよからうといふことになり、學監、教授の人々と共に、私も、其の引率者の一人として始めて永平寺に參拜したことを記憶して居る。何でも此の時は大學林の學生も一所で、新橋停車場を出る時の汽車の混雜は非常なもので、種々な團體參拜の連中も

一つ汽車に乗り込んだのであつた様に思ふ。大學林學生の方では、級長だか何だかが音頭取りをやつて、汽車の福井に着くまで、代る／＼承陽大師の遺徳を讃した唱歌を合唱して行く、思へば此等の音頭取り連も、今では夫れ／＼立派な坊さんになつて居るが、あの時の光景を心に浮べて見ると、とても十年十五年の前のこの様には思はれない。

何でも出立をしたのが五月の二十六日と覚えて居る。此の日は殆んど一日一晩、汽車の中で、哩々言つて、其の翌二十七日に福井に着いた。それから降る雨の中を、草鞋を踏みしめて、其の日に永平寺に着き、學生と共に旦過寮の中に一所こたに寝かされ、特に此の日は、我々の方の待遇係の坊さんが何やらしかつめらしい訓示めたことをやり出した。……今思ふと、あれが確か樸大仙君であつた。其の中に自分丈は、少し體裁のよい、何とかいふ小座敷に遷されたが、然し一人鳥流しに遇つた様な具合ではあるし、參詣人の混雜で、何處も彼處も同じとて、別段自分のためには、何の慰藉

にも名譽にもならなかつた。此の時日本全國から聚まつて來た參拜人は、毎日何千人あつたのか、何萬人あつたのか、兎に角此の山の中の雜沓といふものは、實に御話しにも何にもなつたものではなかつた。私は丁度三晩本山に宿つて居つたが、此の間に怪しげな大佛寺の古跡といふ所にも行つた。此の古跡の餘り嘘らしいのにも驚いたけれども、こゝへ行くまでの間、道も何も無い所を、溪川の水が、ザ、ザツと急激に流れてくる、其の水勢に泡沫の碎ける石を飛びくりにわたつて登つて行く道の興味や、上に登つて遙に山の裏に開けた九頭龍川に沿うた平原を見おろし、これが昔時の波多野の領地だと聞いたときの心もちは、何とも言ひない愉快なものであつた。血脈池も見つた、玲瓏巖（道元禪師の坐禪窟）も見つた、不老閣に於て悟由和尚を拜したのも、今以てまざく、と目に見える様である。

本山に宿つて居る間は、妙な箸箱の大きい様な細長い辨當箱へ、臭い飯を詰めて、其の一方は仕切つて、澤庵二切れと焼豆腐一切れを押込んだのを三度く食はされた。

此の場合食物の小言などは勿論言ふべき限りではなかつたが、最後に島流しの座敷に遷つてからは、豆腐汁といふ、豆腐の臭いのする空汁にありついたが、飯は生存競争で、容易によそつては貰ひなかつた。夜は十二時まで、一時までも、唯もうガヤガヤと過ぎてしまふ。どこといふこともなく、疊の見える隙間をねらつて横になつたかと思ふと、二時には、法堂の方でゴンカンと勤行の音がする。それ禪師さまが御出ましになるぞといふので、總立になつて、顔もろくく洗はないで、法堂へ參詣をする。此の有様で三日三晩續いたので、身體の骨までグタ／＼した様になり、所謂身體綿の如くといふ形容其のまゝとなつて、三十日に本山を下り、また／＼雨に降られながら福井までやつとこさと到着した。するとこゝでは孝顯寺といふ寺で、待ち構へて居て、演説をしるといふ注文に、何が何やら夢の様な心もちで、一席の話をしたと思ふ。其の時の演説を書いたものの中に、こんなことが言つてある。

ア、ひどい山の中

私は永平寺へ参りまして、それから二十八日には大佛寺の舊跡へも登りまして、其の山の深さと、道の峻きとに驚嘆を致しました。大佛寺の舊跡は、果して眞の舊跡であるか否やといふことは、私一己としては甚だ疑はしく思ひましたけれども、然し兎も角も、永平寺へ参りまして、此の寺の非常な山中であるといふことには、一驚を喫しました。此の福井市から永平寺まで参ります道は、今日でさへあの通りの寂寥たる道である。尤も唯今は、参詣者が絡繹として、相押し合うて通る様でありますけれども、私は此の人の澤山出たといふことよりは、道路の如何にも寂寥である、今より六百年も以前には、此の道路は、どんな寥しい所であつたらうか、殆んど想像も出来ないといふことに驚いたのであります。私は、永平寺といふ寺について感じたのは、唯此の山の中といふ一事であります。

實に永平寺のある志比ノ庄は、思つたよりひどい山の中でありました。京都の傍宇治に居を占め、都人士を相手に其の禪を鼓吹して居つた道元禪師が、忽然として此の深い山へ身を退けたといふことは、最も深遠の理由がなければならぬ。私は唯これ丈のことに、道元禪師の面目と性格を見出すことが出来る様に思つたのであります。各宗の祖師方の中で、未だ斯様な山中へ隠れた人は一人もないのであります。傳教大師は叡山に根據を置かれましたけれども、言ふまでもなく、叡山は京都の地續きであります。弘法大師の高野山は、叡山よりは遠いけれども、なほ京都との往來は決して困難ではない。日蓮上人の身延山は大分深山であつたには相違ないが、然し鎌倉から富士川縁に沿うた甲州街道の傍で、鎌倉を距ること、そんなに遠い所ではなかつたのであります。然るに獨り道元禪師の志比の山と來ては、全く塵境を離れた、京都からも、鎌倉からも、丸で消息の絶えはてた深山でありました。道元禪師の人格は、必ずやこゝに現はれて居なければならぬと私には思はれたのであります。

十五年前の追憶によつて、私の胸に浮び出された感想は、今もなほ同じ様に私を動かして居る。これ私が此の追憶をこゝに再び物語りました所以で御座います。

(一)

道元禪師の傳を書いたものは、種々澤山に御座いますけれども、一番古いものは、『建
 撕記』で御座います。これは道元禪師を去ること餘り遠くない時に出来たものであ
 りますから、最も信憑すべきものでありまじやうが、然し中には傳説によつて書いた
 と思はれる怪しいことも雜つて居ないでもないから、絶対に信ずべきものではありません
 すまい。

玄明追放の話は虚誕

禪師が、北條時頼の招きにより、鎌倉に行つて法を御説きになり、永平寺に還つたあ

とで、時頼が越前國六條ノ堡二千石を永平寺に寄附になつたのを御辭退になつた。此
 の時其の寄進状をもつて來たのは玄明首座といふものであつたが、玄明は、此の寄進
 のことを非常に喜んで衆中に觸れあるいたので、禪師は「コノ喜悅ノ意キタナシトテ、
 スナワチ寺院ヲ撥出シ、玄明ノ坐禪ノ牀マテモ、截取リタリト云傳フ。前代未聞ノ事
 ナリ」といふことが、『建撕記』に書いてある。が、如何に道元禪師は、世の名聞を嫌ひ
 給うたからと言って、こんな餘りに神經質な、狭い性急な行爲が、禪師にあつたらうと
 は斷じて考へられない。禪師はこんな冷たい人では決してない。これは禪師の人格を
 知るに最も大事な點で御座います。斯様な説をこしらひてのけたのは誠にひいさの
 引き出しといふべきものであります。

彼ノ玄明ハ、師ノ滅後百三十年ホド後ニ、伊豆國、箱根山ニテ、行脚ノ僧行達テ、
 我ハ是レ越前國永平寺ノ玄明首座ト云者ナリトテ師ノ在世ノ物語シ、竹杖ニスガリ、
 立タマイタルヲ見タルトテ、ソノ行脚僧、永平寺ニ來テ語レリト申シ傳フ、

に至つては、愈々以て怪しいことは明かであります。

紫衣辭退の「勅命重重」も捏造

それからあの紫衣辭退の一件も、これは道元禪師の御性格の上から如何にもありさうなことに思へるけれども、恐らく歴史的事實ではあるまい。即ち後嵯峨天皇から紫衣を賜はつた時に、再三之を辭したけれども御許しがなかつたので、已むを得ず、之を御受けにはなつたが、此の時恩を謝して、「永平雖ニ谷淺、勅命重重、却被笑ニ猿鶴、紫衣一老翁」といふ偈を奉つたといふ傳説である。是は私の考では、皆禪師の師たる、如淨禪師の事蹟からもじつて來たものであります。如淨禪師の事蹟に、朝廷から賜はつた紫衣を辭したといふとがあつて、『正法眼藏』「行持」の卷には、道元禪師御自身で、先師天童和尚は、越上人事なり。十九歳にして教學をすて、參學するに、七旬におよんでなほ不退なり。嘉定の皇帝(宗寧)より紫衣師號をたまはるといへども、つひに

うけず、修表辭謝す、十方の雲衲ともに崇重す、遠近の有識とも隨喜するなり、皇帝大悦し御茶をたまふ、しれるものは奇代の事と讚嘆す、まことにこれ眞實の行持なり。そのゆえは、愛名は犯禁よりもあし、犯禁は一時の非なり、愛名は一生の累なり、おろかにしてすてさることなかれ、くらくしうくることなかれ、うけざるは行持なり、すつるは行持なり。

と書いて居られる。之によつて見れば禪師とても、よし紫衣賜號はあつたとしても、勿論受けられなかつたには違ひあるまいけれども、之を實際の歴史事實として、禪師の上にも、如淨禪師と同じ様にあつたといふのは、大に疑はしい。同じ「行持」の卷に、先師は、十九歳より離郷尋師、辨道工夫すること六十五載にいたりて、なほ不退不轉なり、帝に親近せず、帝者に見えず、丞相と親厚ならず、官員と親厚ならず、紫衣賜號を表辭するのみにあらず、一生まだらなる袈裟を搭せず、よのつねに上堂入室、みなくろき袈裟褌子をもちゐる。

禪師は、實に師匠思ひの人で、一にも先師、二にも先師と、先師の行動を佛菩薩の行動の如く慕はれて居るのであるが、此の紫衣賜號の表辭は、同じ「行持」に二度まで引かれて居る所を見ると、如何に此の事實に推服せられて居たか、わかるので、且つ王者丞相に親近親厚ならずといひ、一生墨の襪子に墨の袈裟であつたと言はれて居る所を見ると、禪師も恐らく生涯「くろき袈裟襪子」で終られたに違ひない。然し紫衣辭退のことは、之から出た話で、後には佛法禪師といふ賜號もあつたのを、辭されたものなど、まで附會せらるるに至つたのであります。佛法といふのは、佛法房といふ、禪師の叡山に居た時の房號であります。

芙蓉の道楷禪師

曹洞宗の歴史の上で、紫衣賜號の表辭で名高いのは、如淨禪師以前に、芙蓉山の道楷禪師の事實がある。此の人は、此の辭退のために、天子の命に背くとあつて流罪にま

でなつた人でありまして、道元禪師は、此の芙蓉の事蹟に就ても、如何にも行持の堅固な人であつたと言つて、推重措かないといふ有様で御座いました。同じ行持の卷に、芙蓉山の楷祖、もはら行持見成の本源なり。國主(宋の徽宗)より定照禪師號、ならびに紫袍をたまふに、祖うけず、修表具辭す、國主とがめあれども師つひに不受なり。といひ、其の行蹟を叙し終つて、「これすなはち祖宗單傳の骨髓なり」と嘆じて居られるのであります。

禪師の寄進謝絶、紫衣辭退は多分此等のことからの捏造と思ひます。若しさうでなかつたならば「永平雖ニ谷淺」の偈も、「永平廣録」なり、何なりに必ず出て居なければならぬ大事なものである筈であります。特に「永平雖ニ谷淺」勅命重重」とは、一體何といふ拙劣な對句でありませう。私は到底之を以て禪師の朝廷に奉るために作られたといふ意味に副はないまづいものと認めるのであります。然し禪師精神のあるところは、勿論芙蓉楷祖、天童如淨と同一轍であることは推して知るべきで

あります。

此等のことは、皆「建擧記」に初めて見えて居る所のものでありますから、此の書物に出て居る傳説は、必ずしも、一から十まで信ずべきものではないのであります。

(三)

これは、左程重要な問題では御座いませぬけれども、禪師の俗系に就いて一言を費した
と思ひます。

通親の子といふ確證はなし

禪師は誰の子であるかといふことは、實は極めて明確では御座いませぬ。「建擧記」の傳説では、唯「洛陽人、源氏、村上天皇九代苗裔、后中書王八世遺胤也」と御座いまして、確に誰の子といふことが書いてはないので御座います。然るに面山和尚が、此

の「建擧記」に訂補を加へまして、内大臣通親の子で、母は攝政基房の女といふとに極めてしまつたので御座いますが、然し決して確かな證據があるわけでも、何でもありません。なほこれには種々の異説が御座いまして、一説では通親の子なる道具の子だともいふし、或は通親の孫通忠の子であるとか、或は通忠の子具房の子だなどともいふのであります。之に就いて禪師の語録なる「永平廣録」を見ますと、

爲_ニ育父源亞相_一上堂。永平柱杖一枝梅、天曆年中殖_レ種來、五葉聯芳今未_レ舊、根莖
果實誠悠哉。

とありまして、天曆年中に殖種し來ると申しますから、確かに村上天皇の後胤と思はれるのであります(天曆は村上天皇の年號)。さうして源亞相(亞相は大納言のこと)とありますから、村上源氏の人で、大納言になつた人の養子になられたと見えるのであります。それは育父とあるので明かでありませぬ。もう一箇所にも、

源亞相忌上堂曰、報_ニ父母恩_一乃世尊之勝鬪也、知恩報恩底句、作慶生道、棄_レ恩早

入ニ無爲郷一、霜露蓋レ消惠日光、九族生天猶可慶、二親報地豈荒唐。

とある。して見ると、實父のことについては忌日上堂のことも見えず、育父でありながら、こゝで「報父母恩」と、殆んど實父母の如く言うて居る所を見ると、餘程幼弱の時から源亞相の養育を受けられて、之を實父母の如く思つて居られたものに違ひないと思ふのであります。實父が通親であるといふことに就ては、久我家所傳の系圖にあつたと言つて、久我通名の證明書があるのであります。後世に出來た斯様なものが、何の證據にもなるものではないのであります。

源亞相とは誰ぞ

源亞相とは誰でありましやうか、之に就いて道元禪師の御生れの年頃から、御入寂前後の頃までの間に、源氏の人で、大納言、或は權大納言になつた人を調べて見ますといふと、總べて六人御座いまして、これが皆久我家系統の人であります。久我家以

外の源氏で此の官に任ぜられた人は御座いませぬ。此の六人の中で、二人は道元禪師より年少でありますし、一人は僅に十一歳の年長でありますから、此の三人は、共に勿論所謂「育父源亞相」ではありますまい。さうして見ると源亞相は、此の三人の内、でなければなりません。此の三人は、共に久我の正統で御座いませぬ。其の一人は唐橋權大納言通資、もう一人は其の子唐橋大納言雅親で、他の一人は堀川大納言通具であります。久我家の正統は、通親の三男通光が繼いだのであります。道元禪師を、何でも久我家の人にしやうとしたために、通光の子通忠を道元禪師の父であるといひ、或は通忠の子具房が禪師の父であるといふ様な説も起つたのであります。此の二人は、共に禪師より年少でありますから、其の信ずべからざることは言ふまでもありません。さりとて通光は太政大臣まで登つた人で御座いまして、大納言で止まつた人では御座いませぬから、此の通光を父とは出來なかつたのでありましやう。そこで已むを得ず源亞相(之を養父と思は)を道具とさめて、之を父と定めた一説が出たので、後にこれ

が育父とわかつたので、通親の子であつたが、早く通具に養はれたものだといふ説になつたものと思はれるのであります。

源亞相系圖

こゝに便宜、久我一家の系圖を示しましやう。

村上天皇—具平親王—後中書王—師房—顯房—

雅實(久我家祖) 雅定—雅通

◎◎ 土御門内大臣

通親

土御門天皇建仁二年薨去、五十四歳、道元誕生時、五十二歳

通具の母修理太夫通盛女、高倉院女房尾張(堀川祖)
通具の大納言任官は、後堀川天皇の貞應元年で、「公卿補任」によれば、これから五年目の安貞元年九月に、五十八歳で薨去になつて居る、これ即ち堀川大納言である。此の説によると、道元誕生の時、恰も三十一歳であつたわけになる、但し「大系圖」では五十七歳薨去としてある。

◎◎ 參議正四位下、建久九年薨去、卅一歳、是道元誕生前二年、母從一位太政大臣忠雅女

◎◎ 大納言正二位、

母修理太夫通盛女、高倉院女房尾張

◎◎ 大納言、正二位、

通資

(唐橋家)
「大系圖」には大納言とあるが、「公卿補任」では權大納言である。土御門天皇元久二年、五十四歳にて薨去。道元誕生の時、四十九歳。

◎◎ 大納言、正二位、

◎◎ 大納言、正二位、
後堀川天皇寛喜三年に大納言任官。一度辭して二年にして再任。後深草天皇寶治三年に至るまで在官略ぼ十八年に跨る。後深草天皇建長元年七十歳にて薨去。道元誕生の時正に二十一歳。

女子 後嵯峨院御乳母、

女子 親子 後鳥羽院妃、土御門院母子、實能圓法師女

◎◎ 太政大臣、從一位、母從三位藤原則子、

通光

(久我家)

◎◎ 大納言、正二位

道元より二十六歳の年少

◎◎ 內大臣、從一位、

◎◎ 權大納言、正三位

◎◎ 大納言、正二位
道元より十一歳の年長

◎◎ 權大納言、正二位

道元より三歳の年少

雅任

◎◎ 興福寺別當、

◎◎ 大僧正、法務、

◎◎ 淨土宗西山派祖、

◎◎ 或云猶子、

◎◎ 叡山日吉別當、

◎◎ 號中山僧正、

◎◎ 東寺長者、法務、

◎◎ 大僧正、法務、

この系圖は、「大系圖」と「公卿補任」とを見合はして掲げたのであるが、こゝには道元とも（希玄とも）何とも書いてはない。兎に角源亞相といふのを此の中で探せば、通具か、或は通資、或は雅親でなければならぬが、年齢の上から考へて、雅親にしては、養子をするには若過ぎるし、通資にしては年が多過ぎる。道具といふ考が適當かと思はれるわけになるのであります。そこで通親の子で、生後二年で通親の頓死を見たと爲め：、通親は、腦溢血でもあつたものか、頓死としてある：。通具が養つて子としたのだらうといふ想像が、何も證據はないけれども、事實に近いものかも知れない。

母は攝政基房の女にあらず

それから御母親に就いて、之を攝政基房の女といふのは、父を通親とするよりも、更に根據がない、これは全く虚構でありまじやう。通親の正妻は、通宗の母たる、太政

大臣忠雅の女といふのが、それであつたらう。通宗は不幸にして早く死んだので、通光があとを相續した。通具は通光の兄であつたけれども、母が卑しかつたので、相續人にはなつて居ない、随つて、年長でありながら、立身も遙に通光の下にあるのであります。通方は母が通光と同じで、通行の母は通具と同じである。若し攝政基房ともあらう人の女が、通親に嫁したとすれば、勿論正妻でなければならず、其の生んだ子を、通光が養はずに、通具が養ふわけもなし、イヤ寧ろ通光以上に禪師が久我家を相續して居なければならぬ筈であります。此の系圖を見ても、基房の女の生んだといふことの系圖に載つて居る人は一人もない、此等は全然信すべからざることと思ふのであります。『永平廣録』の中には、「先妣忌辰上堂」の語が二ヶ所に出て居る。これは實母であらうと思はれるが、勿論俗系名字を知る便にはならない。

(四)

偉人の價値を評價するに於て、血統の尊卑は果して何の役に立たう。けれども、其の當時にあつては、門閥を貴んだ社會であるから、斯様な名門から出た人だといふことが、一般の人からは少からず、其の人に價値をつけたものに相違ない。かくの如き、社會的尊敬を博すべき位置を持つて居り、親戚故舊に多くの外護庇蔭があつたにも拘はらず、京都の附近の生活から遁れて、遠い越前志比の山の中に去つてしまつたといふ所には、そこに何等かの意味がなければならぬ。私が特に禪師の世系に就いて煩しい考證めいたことを、くどくやつて見たのは、たゞこれ文のためであります。

禪師の名門に出でしは疑ひなし

よし其の父母は正確にはわからないとしても、其の名門の出であることは、種々の事情から推して察知する事が出来る。殊に其の入宋の時にも加藤四郎左衛門(景正、尾張)及び木下道正(前左衛門督從三)などいふ公卿侍が供について行つて居るのでも、略ぼ想像

が出来るのであるし、『傘松道詠集』などを見ると、禪師は和歌も嗜まれた。各宗の祖師中には、和歌らしい和歌を詠んだ人は殆んどないと言つてもよい。此の點から言つても、禪師は、一種の堂上風の嗜みがあつたといふことも考へられるのであります。

宋國の禪に失望す

道元禪師の宋に行かれましたのは、後堀河天皇貞應二年のことと御座いまして、師匠の佛樹明全和尚に伴はれて參つたのであります。明全といふ人は、榮西禪師の弟子でありますけれども、どんな人でありましたか、僧傳などには、更に見えて居ない。入宋求法をせられた位であるから、相應の見地のあつた人でありましたやうけれども、不幸にして、彼の地に居るうちに入寂しましたので、還つて其の名を揚げるに及ばなかつたものと見えます。然し道元禪師は、非常に明全和尚を稱揚して、『辨道話』の中にも、「全公は祖師西和尚の上足として、ひとり無上の佛法を正傳せり、あへて餘輩のな

らぶべきにあらず」と言ひ、「舍利相傳記」には、「建仁寺開山前權僧正榮西禪師にしたがひて、教のほかのむねをしり、言の下のみちをあきらめて、迦葉が靈山にいたり、なんぞ懷讓の曹溪にいたりしにことならむ、正脈たゞちに通じ、單傳ひとりあり」などいも言つて居られるのであります。禪師入宋の時は、年僅に二十四であつたのでありすが、その後、彼の地の諸徳に歴參をいたしましたけれども、是といふほどの人にも遇はなかつたので、大に失望をせられた様であります。「近來大宋國に禪師と稱する者多し、佛法の縦横を知らず、見聞いと少し、僅に臨濟、雲門の兩三語を暗誦して佛法の全道と思へり、佛法若し臨濟、雲門の兩三語に道盡せられば、佛法今日に至るべからず、不足言のやからなり」と「見佛」の巻で思ひ切つて痛撃せられ、また「行持」にも、「まことにいま大宋國の諸方に參禪に名字をかけ、祖宗の遠孫と稱する皮袋、たゞ二百のみにあらず、稻麻竹葦なりとも、打座を打座に勸誘するともがら、たえて風聞せざるなり、たゞ四海五湖のあひだ、先師天童のみなり」とも言つて居らるゝ通り、

禪師年少ではあつたけれども、とても當時の支那の禪師づれに満足が出来なかつたので御座いました。そこで禪師は、斷念して日本へ歸らうと思つたのであるが、途中で、天童如淨禪師のことを聞いて、始めて相見して、大に其の人に服し、こゝで眞劍の參究をやられたのであります。

身心脱落、脱落身心

こゝで事新しく詳述するまでもないが、一通り申しますならば、或日、後夜の坐禪で、如淨禪師が僧堂内に來て見られるといふと、一人の僧が、コクリ／＼と居眠りをして居つた。そこで如淨禪師は、之を叱りつけて、「參禪は須らく身心脱落なるべし、只管に打睡して什麼をか爲すに堪へん」と言はれた。傍に居つた道元禪師は、此の身心脱落の一語に、豁然として道に契當した。それからすぐに方丈に入つて焼香する。……これは入室の時の儀式であります。「焼香の事作廢生」……「なんで焼香をするぞ」と言

はれたので、「身心脱落し来る」と答へると、如淨禪師は「身心脱落、脱落身心」と言つて印可された。身心脱落と脱落身心は、函と蓋のびたりと合つた味で、兩禪師の心密付の境界であります。然し道元禪師は飽くまで眞面目な人で御座いましたから、「どう致しまして、まだ、印可をいたゞくには足りません」と言ふ、——「這箇は是れ暫時の伎倆、和尚亂りに他を印することなかれ」と申しますと、淨祖は「イヤ脱落身心ぢや」——「脱落身心」と言つて、どこまでも道元禪師の伎倆を見抜いて證明を與へられたのであります。此の時、禪師年實に二十六歳の時で御座いました。僅にこれが二十六歳の時と聞いては、私は成程禪師は尋常の人ではなかつたといふことを思はずには居られない。其の翌々年に、愈天童山を辭し明全和尚の遺骨を抱いて、まゝの四年、足かけ五年目で日本に歸られたので御座いました。

綿密の宗風

世の中の人は、多く禪と言へば喝とか、咦とか、三十棒とか言つて、唯もう勢ひのよい、痛快なものと思ふといふ風がある様であります。さういふ禪もある、それも禪にないではないけれども、然しそれ許りが禪であると思つたならば、それは非常な間違であります。棒喝の禪は、動もすれば空元氣に終り、何の得る所もない、……つまり一種の法螺に陥るの弊があるのであります。學問にも、机上の空論といふものをこね廻はす理窟屋が居りますが、棒喝の禪は往々にして、道元禪師の所謂「臨濟雲門の兩三語を暗誦して、喝とか、咦とかいひ、大きに大禪師面をし、これで佛法を道盡したと思つて居る族を出す事になるので御座います。これは空論禪、一名法螺禪といふのであります。臨濟禪師の禪は、機鋒峻烈で、三軍叱咤の概があるので御座いますが、其の末流には、此の兩三語暗誦禪がなか／＼多いので御座います。曹洞禪は、之に對するといふと、極めて小心、細心の禪風で、棒喝などは、亂りにやらない、兀々座定と共に日常行持の間に、禪の眞面目を捉へ様とする、所謂綿密の宗風で御座います。故穆山和

尙の話に就いて、小僧が和尚の所へ参りまして、「如何なるかこれ佛法の大意」といふと、「板の間を奇麗に拭け」と言はれたといふと聞いて居りますが、臨濟禪師に對し、定上座といふ人が「如何なるかこれ佛法の大意」と問ふと、「濟、禪床を下りて擒住し、一掌を與へて托開す」……臨濟禪師は、づか／＼と禪床から下りて來て、定上座の胸ぐらを執つ捉かまへて、びしやりと横面を張り飛ばし、づどんと突つばなされたといふのは、大分趣きが違ふのであります。これにも種々次第も御座いますが、其の講釋は姑らく別として、兎に角、日常行動の間、喫茶喫飯語黙動靜、一切に於て禪の眞意を發揮しやうといふところに曹洞禪の味がある。これ道元禪師が、最も日々の行持に重きを置かれ、一瞬時と雖も心を道から離すまい、眞面目に、熱烈に、決して道から放棄しまいと用心せられた所以で御座いまして、此の點に於て道元禪師は實に曹洞禪の完全な體現者と申すべきで御座いましてやう。私が禪師に就いて殊に御話を致したいと思ひますのは、唯此の一事で御座います。

(五)

道元禪師は、誠に情の温かい人で御座いました、涙の脆い人で御座いました。其の父母を慕ひ、其の師を懐ひ、其の弟子を愛する情といふものは、實に篤いもので御座います。

父母師長の追慕

其の父母を慕はれましたことは、前に擧げた忌辰上堂の語で明て御座いまして、「父母の恩を報ずるは、これ世尊の勝躡なり」といひ、「恩を棄て、早く入る無爲の郷、霜露を消せざる惠日の光」……「父母の恩を棄て、出家したのも畢竟これ何の爲めぞ、ここで惠日の光で煩惱の霜露を消せずんば報恩遂に空しからん」ア、一子出家すれば、九族天に生ずとやら、せめてこれ丈でも報恩にはならうかや、……「九族天に生ずる猶ほ

慶すべし、二親の報地豈荒唐ならんや」との嘆息であります。其の剃度の師明全和尚を慕ひ、嗣法の師如淨禪師を佛か菩薩の様に言はれて居るとは、前にも其の一端を述べた如くであります、其の外親しく教は受けなかつたれども、明全の師匠であるといふので、榮西禪師をまた常に師翁と呼んで尊敬せられ、(明全、如淨は、先師と呼んで居られるが、榮西には一邊も先師と言はれた所はない) 『永平廣録』の中には、榮西禪師忌辰上堂の語が、二ヶ所に出て居るが、共に榮西を呼んで師翁と言つて居る「舉、師翁問、虚庵和尚、學人不思議、時如何。虚庵曰、本命元辰。師翁曰、恁麼則不下、從今日去也。虚庵曰、若恁麼則不妨今日去也。師翁禮拜。」云とあり、又「且道、師翁千光和尙、即今在何處」なども出て居るのであります。禪師の斯様な温い人情から考へて見ても、前に述べた玄明に對する秋霜烈日の様なやり方の、禪師の面目でないことを知るに足るでありまじやう。蓋し禪師の禪は、斯くの如き世間ありふれた、誠實のこもつた道徳の上にも明々地に働いて居る所のものであつて、其の外に別に禪なるものがあるといふのではなかつたてありまじやう。

一偈單傳是本孝

『永平廣録』の、明全和尚忌上堂の語を御覽なさい。
 夫欲開演正法眼藏、有第一義門、有第二義門、拈拂、堅拳、頂顙、眼睛、鼻孔、脚眼、擲下於柱杖階下、云、乃這箇等第二義門施設也。且道、此外作麼生是第一義門。山僧今日、開演佛祖第一義門、所生功德、廻向先師大和尚。遂舉曰、迦葉尊者、問阿難尊者、何等一偈、出生三十七品及一切佛法。阿難曰、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教、迦葉然之。大衆要委悉這箇道理麼。良久曰、佛祖甚深最妙旨、猶如今夢、無先覺。弟兄佛口所生子、一偈單傳是本孝、と、拈拂も、堅拳も、捧も喝も、皆これ第二義門の施設である。佛教の眞の第一義門とは何であるか、唯諸惡莫作、衆善奉行、孝より言へば、孝は佛教の一切である。「一偈單傳、是本孝」とは、誠に佛祖甚深の最妙旨ではありませんか。

行持の禪

此のゆゑに、禪師は日常の行持に於て、決して苟もすることを許さない、道は造次顛沛に存するからであります。さればこそ、禪宗では、僧堂の清規は固よりやかましいのでありますけれども、殊に禪師の『永平清規』を開きますならば、『典座教訓』を始めとして、衆僧の職掌と、行住坐臥の一舉手一投足に於て、決して自由放縱を認容しない、『知事清規』では、丁寧に、役割のある僧、即ち世話役の知事(都寺、監寺、副寺、維那、典座、直歳等から監院の僧、たとひ小職に當るものでも、忽にするとの出来るものではないといふことを示し、一々此等の知事僧等が、それ／＼大事發明の實例を擧げて之を策勵せられて居る。『永平廣録』の中には、監寺に謝するため、或は典座に謝するために上堂の語が所々に載つて居るし、監寺、典座を請じた時の上堂の語も掲げてある。「知事者乃三世諸佛之所護念也。難陀尊者勝躅、沓婆尊者之勤修也。當山樹功草創土

木未備、萬事蕭疎、無一人堪忍、若非發心種草之結緣、焉能臨職。」といふ風で、其の知事僧も、皆禪師の弟子であらうけれども、一旦其の職に就くや、之を勞はり、之を尊敬すること、實に斯くの如きものがある。

外國の好人、未だ辨道を得せず

『典座教訓』を見ると、禪師が支那に行かれ、慶元府の海岸に船を着けて居たところへ、六十ばかりの一老僧が来て、日本の商人から、楳(椎茸)を買つて居るのを見た。そこで禪師は、此老僧に茶を出して、種々話をせられたが、其の談によると、此人は阿育王山(廣利)の典座で、六十一歳になるといふ。育王は、これから三十四五里あるが、明日の麵汁を拵へて十方の雲衲に供養しなければならぬが、楳がなかつたので買ひに来たといふ次第である。そこで禪師は、「珍らしく御遇ひしたのを好因縁とし、こゝで少し話をして行かれてはどうか」といふと、「イヤ、私が居なければ、寺では非常に

困却をする」といふ。「典座一人居られんとて、育王の大寺に、齋粥を用意する者がな
 いわけでもありません」といふ。「吾、老年にして此の職を掌る、乃ち老及の辨道
 なり、何ぞ以て佗に譲るべけんや」といふ。「老年になつて、辨道のための此の典座の仕事
 を、何で人にさせられやうぞ」といふ。そこで禪師が更に、「座尊年、何不座禪辨道看
 古人話頭、煩充典座、只管作務、有三甚好事」といふ。「もう老年にもなつて、坐禪辨道、公
 案の工夫でもせずに、煩はしく典座などになり、食物ごしらへに骨を折つて、一體何
 のためになりませうか」といふと、典座和尚々と笑ひ、「外國好人、未了得辨道、未
 知得文字在」：「外國の御方、あなたはまだ辨道といふことを本當に御存知がない、
 未だ真に文字の意味を呑みこんでは居られない」と言はれたので、禪師は大に慚愧赤
 面せられたが、然し其の意味が本當にわからなかつた。「いづれわからなければ、何時
 か育王に御出でなさい、一番文字の道理を商量しましやうぞえ」と言つて歸つて行
 つたといふことを書かれ、非常に感心をして居られる。

佗は是れ吾ならず

それからまた天童に居る時分のこと、一人の典座和尚が熱い一日に、笠もかぶらず、
 佛殿の前で、竹杖を以て頻りに苔(木茸)を晒して居る。「汗流徘徊、勵力晒苔、稍見
 苦辛、背骨如弓、龍眉似鶴」とある。「年はあいくつになられますか」と聞くと、六十八
 歳だといふ。「何故行者の者にあさせなさらぬか」と質すと、「佗はこれ吾ならず」……
 「私と行者とは別じやでのう」といふ。他人にさして自分のした代りにならないとい
 ふのである。「この熱さで御座いますから、少し御休息になつてはどうか」といふと「更
 に何の時を待たん」と答へられたといひ、典座といへば、臺所のおさん役に過ぎな
 い様であるが、なか／＼どうして大事なものと、此の時に思つたと書かれて居る。
 坐禪辨道を、坐る計り、公案のひねくり計りと思つてるものにはよい鑑戒である。列祖
 の行蹟を擧げて、詳かに其の行持を述べられた「行持」の巻も、其の目的はこゝにある。

道元禪師の綿密の宗風、小心細心の風格は、實にこゝに其眞面目を見るのであります。

(六)

また「行持」の卷に、如淨禪師の行蹟を述べた續きに、其の言葉であるとして、
衲子を教訓するにいはく、參禪學道は、第一有道心、これ學道のはじめなり。
といふことを擧げて居る。

有道心、即ち菩提心

道元禪師に取つては、先師如淨禪師の一言一行は、皆自分の規矩準繩であつたのであり
りますから、「參禪學道の第一着手は有道心であるぞ」と示された此の一語は、禪師自
身の一生を支配したところのものであるし、また歸朝後、其の大法弘宣の最初に於て、
先づ發せられた所の第一聲でもありました。「學道用心集」の開卷第一に、菩提心に

ついで言はれて居ることは、まことに此の有道心を拈出し來つたものに過ぎないので
あります。眞の有道心、所謂菩提心とは、これ何の謂でありましやうか。

龍樹祖師曰、唯觀世間生滅無常心、亦名菩提心。然乃暫依此心、可爲菩提心。
者歟。誠夫觀無常時、吾我之心不生、名利之念不起、恐怖時光之太速、所以行
道救頭燃。顧眇身命之不牢、所以精進慣翹足。縱聞緊那迦陵讚歎之音聲、夕風
拂耳也。縱見毛嬙西施美妙之容顏、朝露遮眼也。已離聲色之繫縛、自合道心
理致歟。往古來今、或聞寡聞士、或見少見人、多墮名利之坑、永失佛道之命。可
哀可惜、不可不知。縱有讀權實之妙典、縱有傳顯密之教籍、未拋名利、未
稱發心。有云、菩提心者、無上正等覺心也。不可拘三名聞利養。有云、一念三千之
觀解也。有云、一念不生法門也。有云、入佛界心也。如是之輩、未知菩提心、猥謗
菩提心。於佛道中、遠之遠矣。試願吾我名利之當心。融一念三千之性相。否。證
一念不生之法門。否。唯有貪名愛利之妄念、更無菩提心可取乎。

菩提心とは名と利とを絶対に抛棄するの謂である、名利の拘束を脱しない間は、有道心とは言はれない。一念三千、一念不生、其の語るところは高いけれども、貪名愛利の妄念に、全精神が溺れて居つては、どこに何の菩提心があらう。そこに如何で何の佛法があらう。洵に佛道の中に於て遠くして遠きものである。私は道元禪師の生涯は、此の一段と照し合はして、名利の絶対遠離を體現せられた生活であつたといふことを、ほと／＼感ずる次第であります。

深草の閑居

道元禪師が日本に歸られたのは、其の二十八歳の時でありました。それから暫時建仁寺に居られました、三十の時に、宇治の深草にあつた安養院といふ廢院に住むことになられたので御座います。この安養院といふのは、どんな寺でありましたか、明ではないけれども、餘程の小さな破れ寺であつたに違ひない。然し當時既に深草の「佛法

房の聖人」と言つて、其の名が聞え、學人も段々集つて來たので、少し廣い所が入り用になり、近所の極樂寺といふ古寺に移られたものであるらしい。此の極樂寺も至つて頽廢して居つたのみならず、正式に座禪辨道をやらうといふのには、それ／＼禪堂の設備もなければならぬといふ所から、信徒の人々の骨折で、漸く法堂と禪堂とが出来た、これが即ち今の興聖寺(觀音導利院)で御座います。禪師以前、禪宗は既に日本に傳はつて居つたことはいふまでもないけれども、本式の禪堂で、座禪をするといふことは、これが最初であるといふことであります。此の建築の出來た時に、所謂祝國開堂の儀を行ひ、上堂拈香、

山僧經叢林不多、只是等閑見。天童先師當下認得眼橫鼻直、不被人瞞。便乃空手還鄉。所以一毫無佛法、任運且延時。朝々日東出、夜々月沈西。雲收山骨露、雨過四山低。畢竟如何。良久曰、三年逢一閏、鷄向五更啼。

といふ語がある。「空手還鄉、一毫も佛法無し」朝々日は東に出で、夜々月は西に沈むも、

其のまゝの佛法なれば、三年に一閏、鶏の五更に啼くのも、其のまゝの禪である。此の一語が、實に日本に於ける禪院上堂の最初であることは、『永平廣錄』に、「日本國人聞於上堂之名、最初永平之傳也」とあるので知らるゝのであります。

志比退隱

こゝに居ること、足掛凡そ十五年で、四十四の時に、例の波多野義重の請に應じて越前に赴かれ、志比の山中に、永平寺の經營をせられたのであります。其の五十四年の生涯は、名聞の垢を洗滌し盡し、利養の塵に聊も汚されない、浩潔雪の如き生涯で、兀々として座定し、孜孜として行事を努め、聊も油斷のない、言はゞ充實し切つた一生を終られたのであります。

眞の文字禪

禪僧にして文字あるものは、多く禪録を残し、間また述作のあるものもあるけれども、禪師の様に、禪録以外、多く物を書いた人は恐らくはあるまい。彼の九十五卷の『正法眼藏』の如きも、多くは禪堂で、大衆に口宣をする時の下書といふ様なものであつたらうと思ふが、其の一席の座談も、聊か油斷をしなかつたといふことが、これでも推し量られるのであります。就中前には『辨道話』あり、後には『行持』あり、此の二つは、禪師假名文中の魁なるもので、禪師の禪に關する識見と親切の宗格は、之を『辨道話』に見るべく、其の綿密の實際的特色は、之を『行持』に見るべきでありますやう。

不思議底

藥山座次、有僧問。兀兀地思量什麼。山云、思量箇不思議底。僧曰、不思議底、

如何思量。山曰、非思量。

禪師は、源亞相忌の上堂に、此の話を舉し、「非思量處絶ニ思量、切忌將、玄作、黃。剝地

識情俱裂斷、鑊湯爐炭也清涼」と言つて居られる。「普勸坐禪儀」にも、此の事に基いて、「思量箇不思量底、不思量底如何思量、非思量、此乃坐禪之要術也」と言はる。迷悟を超絶して、道と一體なる不思量底の境に至れば、一切の行動皆佛法で、一言一行悉く修行である。修行の間に道を見、道を發揮する所、こゝに證がある。これ即ち修證不二の禪である。

修證不二の禪

この坐禪の行は、いまだ佛法を證會せざらんものは、坐禪辨道して、その證をとるべし、すでに佛正法をあきらめえん人は、坐禪なりのまつところかあらん。といふ問に對し、「辨道話」に、

佛法には修證一等なり。いまでも證上の修なるゆえに、初心の辨道、すなはち本證の全體なり。かるがゆえに、修行の用心をさづくるにも、修のほかは修をまつおもひ

なかれとをしふ、直指の本證なるがゆえなるべし。すでに修の證なれば、證にさはなく、證の修なれば、修のはじめなし。説き得て、實に無碍なるものであります。

遺偈は虚構なり

なほ禪師については、言ひたいことが澤山御座いますけれども、餘り長くなるのを恐れて、これで省略を致します。建長五年八月、病により、永平寺の法席を孤雲懷奘に譲り、治療のため、京都に行かれたのであります。終に癒えず、其の二十八日に五十四歳で、高辻西洞院俗弟子覺念の所で入滅せられたといふことであります。禪師の遺偈と稱するものが、諸傳に出て居る。

五十四年 照第一天 打箇躑躅 觸破大千 嘆

渾身無所著 活陷黃泉

とあります。(一説に「渾身無覚」)然しこれは天童如淨禪師の遺偈から、いづつて来たもので、恐らくは事實ではありますまい。此の偈ももとは「建誓記」に出たのが最初であります。如淨禪師の遺偈は、

六十六年 罪犯瀾天 打箇隣跳 活陷黄泉 嘆

從來生死不相干

といふのであります。然し眞に生死相干せずんば、死際になつて何の必要あつてか、此の閑文字を弄するか。斯様な遺偈などいふ遊戯に、夢を書く様なことをせない所に寧ろ禪師の眞面目があつたのではありますまいか。私は道元禪師の人格を、斯様な識見の人と見て居るのであります。

親鸞上人

(一)

日本佛教各宗の祖師の中で、凡そ親鸞上人ほど其の傳記の明瞭を缺いて居るものはあるまい。今日傳はつて居る上人の傳記としては、僅かに上人の曾孫に當る覺如上人の『親鸞聖人傳繪詞』、即ち普通に『御傳鈔』と稱して居るものがあるばかりである。しかも此の『御傳鈔』といふものは、歴史的價値の全く認められないもので、其の記述は殆んど信用するに足らないものばかりである。

我成玉女身被犯

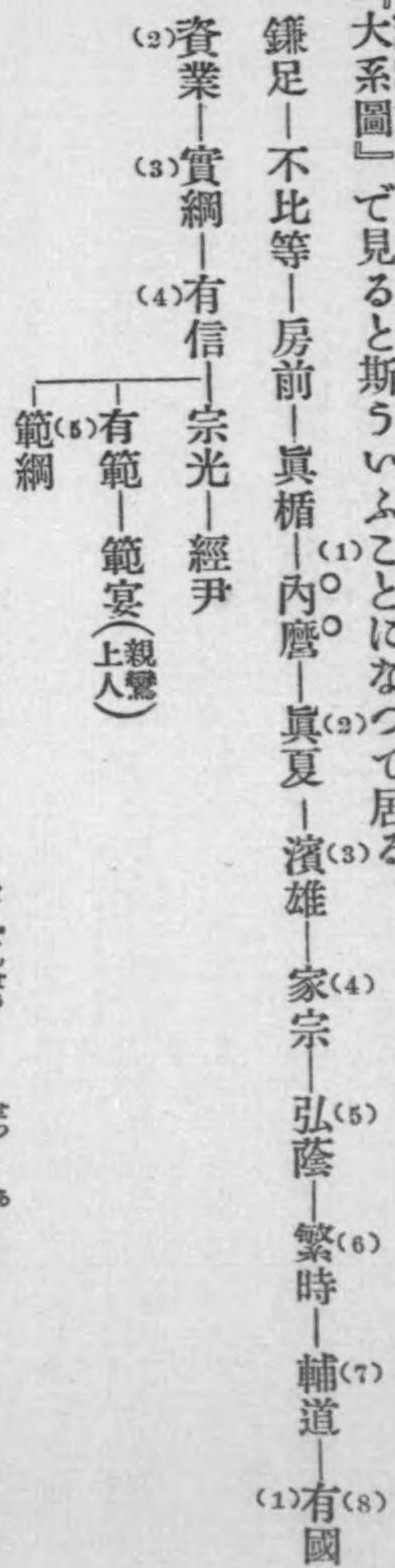
繪詞だけは、極めて簡単なものであるが、其の中にも六角堂參籠、觀音夢想の告命が

あつたといふのを最初に、此の片々たる小冊子の内に、夢物語が三つもある。特に六角堂観音の「行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂」との御告に基き、玉日媛を娶つたので、則ち玉日は此の観音の化身であるなど、いふに至りては、實に滑稽の極みと言はなければならぬ。我成玉女身被犯とは、随分甚しい言葉である。

系圖調べ

斯く既に上人の傳記を知らうとしても、殆んど便るべき材料がないので、傳説により一般に言ひ囃されて居る傳記の眞偽といふ様なことになると、とても之を明に言ひ切る事の出来ないものばかりである。兎に角普通「御傳鈔」などと言ふ所では、系圖は藤原鎌足から始まつた、藤原氏の系統で、右大臣内膳六代の後胤、彈正大弼參議有國五代の孫皇太后大進有範の子といふことになつて居る。別にこゝで學究的に系圖調

べをするでもあるまいが、思ひつゝいたから一言して置くのであるが、「御傳鈔」では、鎌足から親鸞上人まで通計十五代になるわけで、即ち内膳までが前四代あり、内膳から有國までが六代、有國から有範までが五代といふことになるのである。然るに之れを「大系圖」で見ると斯ういふことになつて居る。



これでは、有國を、内膳から六代の孫といふ「御傳鈔」の説に合はないことになつて来る。これはどうしても、覺如の記憶間違ひか、勘違ひと斷ずるの外はない。されば其の後の諸傳、皆六代と言つて居ながら、系圖は皆八代に書いて居る。「本願寺系圖」も八代になつて居る。「大谷派本願寺通紀」も代數を數へたところは八代にして、上人

を鎌子連十八世孫と書いて居る。此等は、本願寺の傳から言へば、『御傳鈔』の信ずべからざる點のあることを立證して居るものである。それから有範を有國五代の孫と『御傳鈔』に書いた點は、本願寺の大に辨解に苦しむ所であつて、『大系圖』も、單に本願寺の傳を取つて、其のまゝ系圖に書き加へたものであるから、斯ういふ圖になつて居るのであるが、然しながら、年代紀を廣げて勘定をして見ると、どうしても、これが勘定の合はない點があるのであります。即ち親鸞上人の御誕生は高倉天皇の承安三年になるので、此の年は有信の死んだ承徳三年から七十四年目になる(有信は承徳三年に六十一歳で死んで居る)して見ると有信の死んだ年に有範が生れたと假定しても、上人は、有範の七十四歳の時の子でなければならぬ。若し有範が二十歳位で父の死に遭遇したと假定したら、上人は九十四五歳の時に生れた人となる。しかも上人には、なほ尋有以下の弟があるといふのであるから、有信は百歳以上までも子を生ましめたといふことになる。これ普通あり得べからざることである。そこで此の不都合を何としたものであらうと

ふわけで、今度は、有信の子が宗光、其の子が經尹、有範は其の經尹の子だといふことを、誰から言ひはじめたのか、言ふことになつた。それは『大系圖』とは全く異つた説で、何に根據をして主張をすることが出来るのかわからないが、兎に角それで中に二代を入れて、年代を合せやうといふので出て來たものであらう。『本願寺系圖』などは此の説によつて居る。此の系圖調べはなか／＼むつけしいことになつて居るけれども、要するに辻褄を合せやうとして、『本願寺系圖』などの様に宗光、經尹を中に加へたならば、『御傳鈔』に合ない。『御傳鈔』の權威を維持しやうとすれば、年代が合はない、どつちにしても、デレンマにかゝつて居る、こゝは本願寺の弱味で、到底其の傳説的系圖の怪しいことは疑はれない。……然し昔時は兎に角、今日の時代にあつては、系圖などは、勿論どうでもよい、自分は系圖によつて上人の價値を是非しやうといふのではない。唯上人の傳記の容易に明め難い發端の疑問として、其の一例を出しただけのものである。『高田正統傳』には、高田特殊の傳だと言つて、宗光は有信の弟

經尹は有信の子で、有範は、經尹の子だといふ一説を立て、居るが、然し素より信用すべき理由のあるものではない、唯序でにこゝに附け加へて置くだけのとてあります。

(二)

其の外傳記についての疑問は、決して一二に止まらないが、今一々こゝに之を論ずるのが目的ではない。斯くも不明な傳記の親鸞上人の人格を考へるといふことは、唯其の遺訓と著述との二つによるより外に道がないのであります。

親鸞上人は實在の人にあらざるか

歴史家などの中には、親鸞上人の傳記が、殆んど不明であるために、恐らくは歴史的人物ではない、架空の人間であらうなど、まで論ずる人もあるさうであります。これも一應尤なこととてあります。自分の不思議に思ふのは、親鸞上人の名であります。

まず。初め法然上人の門に入つた時には、純空と言つたが、後に善信と改め、それから親鸞と言つたといふ。されど眞宗の教義上、オーソリティーとして居る、支那の道綽、日本の源空を最初に取り、支那の善導、日本の源信を次ぎに取り、最後に天竺の天親、支那の曇鸞を取つて、殆んど眞宗の所謂七祖の名を網羅して居る……龍樹一人を除いて……といふことは、何となく架空捏造の名ではないかと思はれるふしがないでもない。然し自分は上人を架空の人物とすることは賛成が出来ない、何となれば、假令其の傳記は、史實として全く不明であるとしても、其の多くの著述は、明に上人の思想と人格とを傳へて、其の偉人なりし此の史的人物を我々に證明して居るからであります。

著述は後人の偽作にあらず

或は此等の著述をも皆後人の偽作と考へるかも知れないが、然しそれは到底事實とし

て許されぬこととあります。何となれば、上人の著述は一つや二つではない。「御本書」、「略文類」、「御和讃」、「愚禿鈔」を始めとし、其の数が非常に多いにも拘はらず、其の間には、文章にも思想にも一貫の特色があつて、到底これは一人の手に成つたものであることが疑がないし、さうして若し之を偽作であつたとすれば、誰人がかゝる特色のある思想を以て、架空の人物に托し、偽作をしたのであるか、とても考へることが出来ないからであります。若し強ひて之を偽作したとすれば、覺如上人以下にもつて行くとは出来ないし、さうかと言つて、覺如上人以前には、そんな偉い人物は見出されないから、覺如上人の偽作とも言ふより外に致し方がないことになるのであります。然し此等の書物を以て覺如上人の著述と比較をして見たらば、決して其の同一人の手に成つたものでないことはすぐ直覺されるのであるし、それに本願寺系統のために、其の根柢を堅めた覺如上人に對し、正反對に立つて、本願寺統は親鸞上人の正統にあらずといふとを主張し、戰國時代には終に鋒刃相見えたるほどの仇敵視せられ

た間柄である高田派（専修寺）でも、此等の親鸞上人の著述に就いては、何の疑ふ所なく之を採用して居るのであります。若し之が覺如上人の偽作であつたとしたら、高田派で之を用ひ様管もなし、随つて覺如以前に、親鸞宗たる高田派もなかつた筈だといふことになりはしないでありませうか。或は覺如以前に之を偽作したものがあつて、それが本で高田本願寺といふやうな派が分れたものだとしたならば、誰が其の偽作者でありませうか、とても考がつかないのでありますし、それ文の年數の餘裕もない様であります。親鸞上人の入寂は龜山天皇の弘長二年とすると、これから九年目の正平六年（北朝觀應二年）に覺如上人が生れて居るので、これは申すまでもなく、親鸞上人の女の覺信尼の孫に當るのでありますして、親鸞上人の曾孫であります。曾孫とは申しますけれども、此の時祖母の覺信尼が、やつと四十歳であつたのでありますから……父覺惠の年は明でない……親鸞上人と年代を隔て、居ることは、幾らでもないのではありません。さうして覺如上人が、例の「御傳鈔」を書かれたのが二、十六の時であるか

ら、親鸞上人滅後、僅に三十餘年の後のことである。僅に三十年や、四十年の間に、他の人によりて、これ丈の偽作が出来たといふと、覺如上人が、また甘んじて之を信用し、弘布したといふことは、到底考へ得られることではないのであります。

關東北陸の遺蹟

また關東から北陸の親鸞上人の御遺蹟を巡拜するならば、例の二十四輩を始として、其の門侶の決して少くなかつたことを想像することが出来るのであります。中には勿論後世の附會も少くはないでありましやうけれども、其の弟子達が、其の信仰を應分に所々に説いて居たものだといふことも殆んど疑のないことの様である。全く架空の人物を根本として、斯くまで遺蹟が、至るところにあるといふことは、餘りに實際に相應はしくない。それに此等の遺蹟も、既に覺如上人當時既に存在して居たのであるといふことも考へなくてはならない。覺如上人が御遺蹟を巡るために關東に來たとい

ふ時に、此等の遺蹟を、急に捏造してあるいたなどは、とても考へられることではなす。

(三)

親鸞上人の生涯には、何となく活き、くした、何と言ひましやうか、マア潑刺とでもいふべき氣分が通つて居る様に考へらるゝのであります。

法然上人と親鸞上人

之を法然上人と相對比して考へますといふと、法然上人は、如何にもオツトリとした春の暖さを感じる様に思ひますが、親鸞上人にありては、冴々とした、スツキリした、秋の月の夜とでも言つた様な感じが致すのであります。之を教義の上から申しますならば、法然上人の念佛は、まことに簡單で、唯念佛さへすれば極樂に行くことが出來

る、其の外には、一つもわけも理窟もない、それが佛の御本願である、唯これ丈のこととて、他には何もないのであります。それであるから理窟の勝つた人から見ると何となく物足りない、漠然たる所がある様でありませうけれども、然しそこにまた従容として、如何なる機をも容れるといふ、如何にも窮窟でない、ユトリのある所が認められるのであります。其處へ参りますといふと親鸞上人は、大に趣を異にして居つて、何處までも、徹底して、スバリ／＼と一刀兩斷的に言ひ切つてしまはなければ、満足の出來ないといふ風が十分に見えて居るのであります。それでありませうから法然上人の言葉は、何時でも、柔かでありませうけれども親鸞上人は、どの方面に向つても言ふことが非常に強い、頗る徹底的で、之を聞くものは、ホツと息を吐く様な、心の急所をキューツと押される様に感じたに違ひないと思はれるのであります。

地獄は一定住家ぞかし

親鸞上人の言行録とも申しませうか、其の見聞のまゝを書いたと言はれて居ります、彼の「嘆異鈔」は、能く此の消息を傳へて居るのであります。彼の有名な、親鸞におきては、唯念佛して彌陀にたすけられ参らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり。念佛は、まことに淨土に生るゝ種にてや侍るらん、また地獄に墮つる業にてや侍るらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされ参らせて、念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候。其の故は、自餘の行をはげみて佛になりべかりける身が、念佛を申して、地獄に墮ちて候はゞこそ、すかされ奉りてといふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住家ぞかし。

何と強い宣言でありませう。「淨土に生るゝ種にてや侍るらん、また地獄に墮つる業にてや侍るらん、總じてもて存知せざるなり」といひ「とても地獄は一定すみかぞかし」といふ、其の絶待信憑を語り、其の罪惡の自覺を説く、一語些の遺憾のない、斯

様な言葉を断じて言ひ切る人は、實に親鸞上人以外には見ることの出来ない點であります。

各十餘箇國の境を越えて、身命を顧みずして、尋ね來らしめ給ふ御志偏へに往生極樂の道を問ひ聽かんがためなり。然るに念佛より外に往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと、こゝろにくく思召し在りましたはんべらんは、おほきなる誤りなり。若し然らば南都北嶺にもゆゝしき學生たち、多く座せられて候なれば、彼の人々にも遭ひ奉りて、往生の要よくく聽かるべきなり。

と言ふ言葉に引き續いて、洵によく自己の智識、見解、學力により、宗教を得んとするものを誠め得て、言々骨に徹するの思があるものであります。智識でもない、理解でもない、學問でもない、自分は唯佛を信するばかりである。

彌陀の本願、まことにおはしますさは、釋尊の説教、虚言なるべからず。佛説まことに在しますさは、善導の御釋虚言し給ふべからず。善導の御釋まことならば、法然の

仰せ、そらごとならんや、法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもて空しかるべからず候歟。詮ずるところ、愚身が信心におきては斯くの如し、此の上は、念佛をとりて信じ奉らんとも、また捨てんとも、面々のおんはからひなり。其の緊張した、其のキツバリした言ひ分は、實に痛快極まるといふの外はないのでありまして、かういふ具合のところは、決して法然上人に於ては見ることの出来ない點であるのであります。

況んや悪人をや

法然上人の言葉に、五逆の罪人を擧げてなほ往生の機に收む、況んや餘の輕罪をや、いかに況んや善人をやといふことがあるのであります。然るに親鸞上人は、此の普通の言ひ方に満足せず、善人なほもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや。然るを世の人常に曰く、悪人なほ往生

す、如何に況んや善人をやと。此の條一旦其の謂れあるに似たれども、本願他力の意趣に背けり。

所謂惡人正機の眞髓を道破した言葉であつて、彌陀の本願の歸着は押し詰めて行けばどうしても斯う言はなくてはならぬ筈であります。

然れば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさる善なき故に。惡をも恐るべからず、彌陀の本願を妨ぐるほどの惡なき故に。

とあつて、動もすれば、無道徳主義を鼓吹する様にも見えて、頗る危ふない様にも思はれるのでありますが、然し法然上人とても、同じ様なことは始終言つて居られるので、唯親鸞上人の様に、言ひ方が強く鋭くない丈のこととあります。

五逆十惡の重き罪造りたる惡人、なほ十聲一聲の念佛によつて往生をし候はんに、まして罪造らせちはします御事は、何事か候べき。たとひ造らせ候べきにても、いく程の事は候べき。この經に説かれて候罪人には、いひくらぶべくや候。

など『和語燈錄』(正如房へつ)に見えて居りますが、これは法然上人流の口調で、前の

『嘆異鈔』の文は、大に趣を異にして居りますけれども、然し罪惡深重の衆生に罪惡を恐れるな、それが彌陀本願のある所以だといふのであるから、押し詰めれば惡人正機で、「惡をも恐るべからず」、「況んや惡人をや」とならなければならぬわけがあるものであります。

(四)

親鸞上人の言葉は、チヨイト見た時には、誠に極端なことを言ふ様に思はれるのであります。然し再應味つて見るといふと、どうしてもさうなければならぬ、結極を言ひ抜いて居るので、成程と首肯されることが多いのであります。

最も明快

親鸞は、父母の孝養の爲めとて、一遍にても念佛申したること候はず、といふ様なことも、國のための念佛とか、親のための念佛とか、兎角他を利用する意味の佛教と、常識で考へて居る人々のためには、誠に意表に出た言葉といはなければならぬ。親鸞上人にあつては、彌陀の本願では、唯信仰によつて救はるゝ外、たとひ父母といへども、之を如何ともすることが出来ないといふのが、他力念佛の骨髄であります。自分の功德を回向して、父母や、他人の力にしようといふ様な、俗信仰を破り得て、最も明快なるものであります。

法然聖人の御時、御弟子其の數多かりける中に、同じ御信心の人も少くおはしけるにこそ。親鸞、御同朋の御中にして御相論のこと候ひけり。其の故は、善信が信心も聖人の御信心も一つなりと仰せの候ひければ、勢觀房、念佛房など申す御同朋達、もての外に争ひ給ひて、いかでか聖人の御信心に、善信房の信心一つにはあるべきかと候ひければ、聖人の御智慧才覺廣くおはしますに、一つならんと申さばこ

そひがごとならぬ、往生の信心において、またく異なることなし、唯一つなりと御返答ありけれども、なほいかでか其の義あらんといふ疑難ありければ、詮ずる所、聖人の御前にて自他の是非を定むべきにて、此の子細を申しあげければ、法然聖人の仰せには、源空が信心も、如來より賜はりたる信心なり。善信房の信心も、如來より賜はらせたまひたる信心なり。されば唯一つなり、別の信心にておはしません人は、源空が參らんずる淨土へは、よも參らせ給ひ候はじと仰せ候ひしかば、當時の一向専修の人々の中にも、親鸞の御信心に一つならぬ御事も、候らんと覺え候。云々といふことがあるが、これは果して事實あつたことか、どうかは明でないけれども、淨土宗の鎮西上人(房光)が、法然上人に問はれた時のことに同じ様なことがある。或時、問うて曰く、上人の御念佛は、智者にて在せば、我等が申す念佛にはまさりてぞおはしまし候らんと思はれ候は、ひが事にてや候らん。その時上人御氣色あしくなりて、仰せられて曰く、さばかり申す事を用ひ給はぬ事よ、若し我が申す念佛

の様風情ありて申候はゞ、毎日六萬遍のつとめ空しくなりて、三惡道に墮ち候はん、またくさること候はずと、まさしく御誓言候しかば、それより辨阿愈々念佛の信心を思ひさだめたりき。

前には信心といひ、後のは念佛と言つて居るから、意味は相違して居るけれども、同工異曲の話で、しかも前のは如何にも親鸞らしい話になつて居るし、後のはどこまでも、鎮西らしい問答になつて居るのは面白いことである。

親鸞は弟子一人ももたず候

兎に角親鸞上人は、師の信心も、弟子の信心も、信心に二つはない。我が信心として、如何で法然上人の信心に異ならんとの考を有つて居つたことは確で、またおめず臆せず、之を師の前でも言ひ得るたちの人であつたことは疑がない。否、自分と師匠と信心に二つはないのみならず、自分の信心と、一文不知の尼入道のやからとの信心も信

心に二つはない、皆これ彌陀回向の一つの信心だと信じて居られたに違ひない。さればこそ弟子師匠などいふことは、苟にも言はれない。

専修念佛のともからの、我が弟子、人の弟子といふ争論の候らんこと、もての外の子細なり、親鸞は弟子一人ももたず候。其の故は、我がはからひにて、人に念佛を申させ候はゞこそ、弟子にても候はぬ、偏に彌陀の御催しにあづかりて、念佛申し候人を、我が弟子と申すこと、極めたる荒涼のことなり。

とあつて、どこへまでも、御同朋、御同行といふ言葉で押し通して居るのは、これまた外に類のない平等主義であります。「親鸞は弟子一人ももたず候」とは何と強い言葉でありまじやう。

謙抑卑下の宗風

キバリくとした、強い點だけを述べてくると、親鸞上人は、如何にもケババくしい

風貌を表に現はし、奇矯の言を發ちて喜んで居るといふ人の様に見えるのであります
 が、決してさうではない。表に賢善精進の姿を現することは、飽くまで斥けて、そこ
 は法然上人の、自ら「愚癡の法然、十惡の法然」で居られたと同じ様に、謙抑卑下して
 敢て人の上に居らなかつたことは、まことに真宗々風の一つの根源になつて居ること
 は、今更申すまでもない。「和讃」をはじめ、上人の言葉の上には、常に見えて居る所
 のものであります。「御消息集」の中に眞淨房に與へられました手紙として、其の中に、
 さては念佛のあひだのことによつて、ところせき様に承はり候、返す／＼心苦しく候、
 詮ずるところその所の縁を盡きさせ給ひ候らん。念佛をさへるなんと申さんことに、
 鬼も角も嘆き思召すべからず候。念佛止めん人こそ如何にもなり候はめ、申し給ふ
 人は、何か苦しく候べき。餘の人々を縁として、念佛を弘めんと計らひ合せ給ふこ
 と、ゆめ／＼あるべからず候。其の所に念佛の弘まり候はんことも、佛天の御計ら
 ひにて候べし。…その所の縁盡きさせ給ひ候はし、候はし、何れの所にて、移らせ給

ひ候ておはします様に、御はからひ候べし。云云

これはいづれ念佛に妨碍の起つた時に、強ひて之を弘めんことの益なきを誠められた
 ものでありましやうが、「その所の縁が盡きさせ給ひ候らん」と引き下がる所は、日蓮
 上人の

各々の責められさせ給ふ事も、詮ずるところは國主の法華經の敵となれる故なり。
 國主の敵となることは、持齋等念佛者等眞言師等が謗法より起れり。今度忍じくら
 して法華經の御利生心みさせ給へ、日蓮も強盛に天に申上候なり。愈をつる心ね、
 すがたをばすべからず、定んで女人は心弱くをはすれば、御前たちは心ひるがへり
 てやおはすらん、強盛に切齒をして弛む心なかれ。例せば日蓮が、平左衛門尉がも
 とにて打ち振舞ひしが如くすべし、すこしも畏る心なかれ。和田が子となりしもの、
 若狭守が子となりしもの、將門貞任が郎従となりしもの、佛になる道にはあらねど
 も、恥を思へば、命を死ぬ習なり。何となくとも、一度の死は一定なり、色ばしあ

しくして、人に笑はれさせ給ふな。(「兄弟鈔」)
など言はれたのに對して見たならば、如何に其の相違の甚しきかを明に見ることが出来るでありませう。

(五)

斯様に親鸞上人は、謙抑の人であり、敬虔の人であつたのでありますが、然しまた上人は徹底の人であり、識見の人でありました。其の信仰を語るのに、突つ込んで、人の中心を突くところは、其の徹底の人たる所以で、其の徹底の人たる所以は、其の識見の確で、他に超越して居られたところがあるのに基くものであると言つて差支がなからうと思ふのであります。

經典讀破の識見

親鸞上人は、自己の識見で以て、經文の讀み方なども、随分無理な點をつけて讀んで居る。此の點から言ふと、上人は、御經を文字通りに解釋した人ではない、自分の考を御經の文句を借りて表明したといふ方が適當であると思はるゝ點もあるものであります。例へば眞宗で一番大事な依りどころとする願成就の文の如き「聞其名號信心歡喜、乃至一念、至心回向、即得往生、住不退轉」の中の「至心回向」を「至心に回向し給へり」と讀ませ、彌陀の方から、回向し給ふ他力の信心と解釋するなどは其の一つで「至心に回向し給へり」は随分無理な讀み方である。斯様な例は至る所に澤山あるのであつて、前に擧げた「華嚴經」の「歡喜信心」なども「信心を歡喜す」と讀ませるのであるが、これは今の願成就の文の「信心歡喜」と一つにするために、返り點をつけて、斯ういふ無理な讀み方をさして居るのであります。斯ういふところはどこまでも上人の識見に任せて、經意を讀み破るといふやり方で行つて居るのであります。

自力方便義

自分はなほ親鸞上人の識見を語るに就いて、真宗の教義上のことを一と通り述べなければならぬのであります。先づ第一に言ふべきことは、自力門と他力門との關係であります。法然上人にあつては、また自力、他力の關係を語るに當りて、「自分達の様な智慧もなく才覚もなく、とても自分で佛になるだけの力量のない凡夫には、結構な自力門には及びもつかないから、唯阿彌陀如來の大悲の御力にすがつて佛になるより外に仕方がない」といふ風に自力を一段高いものとして、我々は低い他力門によるより致し方がないといふ態度で念佛を稱へたものであります。勿論親鸞上人も一面斯様な態度を全く取られなかつたのではないが、然しさう言つて居る言葉の裏面には、眞實を言へば、自力を高しといふのは方便で、罪惡の凡夫の成佛する道は絶対に他力より外にはないのである。即ち自力の教は方便であり、他力の教は眞實であると判ずる

のが、佛の本意であるとするのであります。即ち親鸞上人の、釋尊一代の説法に對する見識は、他力の絶対的價値を認めて、自力を方便教と落すのでありますから、決して自力は高い、我々の力は他力により離る外はないといふ話ではなく、一切の衆生は、元來他力によりなければ、救はれないといふのが必然の約束なのである。故に佛最初の説法なる『華嚴經』より、同じく最終の説法なる『涅槃經』に至るまで、佛陀五十年の經説は、表面に自力を標して居つても、裏面には悉く他力の主張が貫通して居るものであると見るのである。さればこそ『御本書』にも、『涅槃經』の「大信心者即佛性、佛性者即是如來」の文を引いて『涅槃經』の大信心は、他力の信心を暗示して居るものであることを言ひ、『華嚴經』の「聞此法歡喜信心無疑者速成無上道」の文を引いて『華嚴經』の「歡喜信心」は、『大無量壽經』の「信心歡喜」と同一の他力義を暗示するものであると言ひ、佛の最初の説法たる『華嚴經』より、最後の説法たる『涅槃經』に至るまで、一代の諸經は皆他力義が裏面に貫通して居るものであるといふことを示

されて居る。これは『和讃』の方では、『諸經和讃』で、同じ意味のことを明示されて居るのであります。まことに上人の、一代教に對する、識見のある所を知るに足るものと思ふのであります。自分は親鸞上人の此の立場を、假りに自力方便義と名けるのであります。

絶對他力義

第二に絶對他力義に就いて一言致します。言ふまでもなく、他力教は念佛して淨土に往生し、成佛するといふ教であります。それであるから、法然上人は、「往生之業、念佛爲先」と申され、阿彌陀佛の第十八願の文の「至心、信樂、欲生我國、乃至十念」とある文に就いて「乃至十念」といふ所に重を置かれ、一念でも乃至十念でも南無阿彌陀佛と稱へさへすれば、必ず往生が出来ると言はれたのであります。ところが親鸞上人は、例の徹底的の立場から、其の一念乃至十念の念佛はどうして口に出てくるかと考

へるといふと、至心、信樂、欲生我國といふ心から、口に稱名が出て来るので、心の方が根本である。「至心、信樂、欲生我國」といふのは、『觀無量壽經』に所謂、至誠心、深心、回向發願心と説かれた三心のことで、此の三心具足さへすれば、口に稱名は出てくるのである。つまり心の底から自分の罪惡と佛の慈悲力とを信じて、往生成佛を願ひさへすれば必ず往生が出来るといふのであります。之を三心具足といふけれど、も實は信の一字に盡さる一心で、『無量壽經』の願成就の文では、之を「信心歡喜乃至一念」で、一念と説かれて居るのである、これ所謂一念の信心といふのであります。こゝに於て上人は、往生は念佛によるのではない、信心によるものであるといふ、信心爲本の結論に到達したわけでありす。信心とは何であるかといふと、「信心トハマコトノコ、ロナリ、マコトノコ、ロトハ佛ノコ、ロナリ」とありまして、自己の力で稱名を勵むのでもなし、また自分の考で信ずるのでもない、全然自己の能力といふものを没却して、佛力以外に自分を見ない、信心を獲得するといふことは、佛の口、口

即ち佛心を無能力の凡心の中に投じて貰ふことであつて、之を他力の廻向と名けるのであります。此の他力の廻向により、凡心を佛心と一致するのを一念の信心獲得とも言へば、佛凡一體とも、機法一體とも名けるのであつて、畢竟絶對他力の立場から見れば、一切の自力をたのみとする間は、未だ眞の無我の境といふことが出来ない。純粹無我は、絶對他力によりて始めて味はれるといふ考で、純粹他力は、要するに無我といふ言葉と同一内容を意味するのであります。法然上人にあつては未だ自己と佛陀と相對し、自己を佛陀の力によせかける意義を有つて居つたのであるが、親鸞上人にあつては、他力の外に、全然自己の能力を否定して居るのでありますから、之を絶對他力、或は純粹他力と名けて然るべきであらうと思ひます。自分は假りに之を絶對他力義と名けるのであります。

平生業成義

第三に述べべきものは平生業成義であります。法然上人は、念佛をして、臨終になると阿彌陀如來は、極樂から御迎ひに来て下さつて、之によつて行者は極樂に往生するのだと説かれて居るので、之を彌陀の來迎といひ、四十八願の中の第十九の願に此の彌陀來迎のことが誓はれて居る。故に臨終といふこと、來迎といふことが非常に大事な教義上の骨目をなすことになつて居るのである。法然上人門下の學者達でも、鎮西上人は勿論、異流と目せらるゝ長樂寺の隆寛律師でも、邪義と斥けらるゝ九品寺の覺明、長西上人でも、皆此の臨終と來迎を言はないものはないのであります。然るに親鸞上人は、信心爲本といふ根柢に立つたものであるから、信心を獲た時に往生の業事は成辨すると言つて、死際を俟つまでもなく、生きてる内に、往生は決定するのである。即ち一念の信心獲得の時、所謂平生の時に、往生はさまるるので、臨終といふことは、往生に何の關係がない、故に之を平生業成といふのであつて、隨つて平生業成には、來迎は入らない、そこで不來迎の義といふことを言ふのであります。一言に

して言へば、一般の淨土教の高僧方は、往生と臨終に特別の關係あるものとして説かれたのに、親鸞上人は、臨終から之を平生に逆戻しをして、未來主義と現實主義とを調和し、平生業成と主張せられたのであります。

念佛報恩義

第四に念佛報恩義のことを申しまじやう。既に念佛によつて往生するのではない、信心によつて往生するのであるときまつた以上は、往生成佛の爲めには、念佛は全く無用のものである、信心を獲得した上は、心は佛心を體したので、此の迷の身心を離れない生活にも、心の奥には佛の光明が透徹して居つて、所謂「有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみ遊ぶ」で、一擧手一投足、兎角缺點なき我が實生活が、常に懺悔の念に勵まされつゝ、刻々進んで行くことが出来る様になる。之を正定聚の菩薩の生活とするのである。然らば稱名は最早全く入らないのかといふとさうではない。稱名と

は、佛を呼ぶこととて、佛の恩を思うて感謝の念を表すために佛名を呼ぶ、これが念佛で、之を報恩行の念佛といふのである。若し此の理を押し擴げて言ふならば、念佛計りが念佛ではない、我等一切の行動は、皆佛陀に對する報恩行で、口に稱ふる念佛を身にも行ひ、心にも思ひ、身口意三業相應の生活が、念佛の生活であると言つてもよい。斯くして念佛聲裡に、念々常懺悔の態度で、此の世を送ることの出来るのが、他力行者の生活といふのであります。以上自力方便義、絕對他力義、平生業成義、念佛報恩義の四つは、實に眞宗の四大眞髓であると信じます。これは親鸞上人獨得の法門で、全く上人の識見から出た一つの新佛教であり、新信仰であると言はなければなりません。

肉食妻帯

なほ此の外にも僧俗の區別を打破して、肉食妻帯を標榜した、僧俗無別義の如きも、

特殊な點として數へれば數へてよいのでありますし、一般の人は、多くこれに重を置いて、例の西洋のルーテルなどに比較して、これをやかましく言ふのでありますけれども、これは寧ろ眞宗に取つては第二義門であります。第一義は、矢張り教義的立脚地にあるのでありますして、肉食妻帯の如きは、法然上人にも、其の主張はあります。彌陀の本願は僧俗の別なく、念佛の行者を攝取することは、當然であるからであります。たゞ法然上人は、なほ僧俗の別を見て、僧俗共に救はれると考へたのを親鸞上人は僧俗無別として、救済を語られた丈のものであります。親鸞上人に就いては、なほ言ひたいこともありすけれども、餘り長くなりますから之にて一段落と致します。

蓮如上人

(一)

蓮如上人の傳記は、親鸞上人ほどに、わからぬものではない。現に『遺徳記』の様な上人を去ること、餘り達からぬ時代に出來た書物もある。比較的史實を得るに困難でない方である。とは言へ、然し上人は果して、どんな人であつたらうか、其の性格の全體を、ありく、と、眼に映る様に、腦裡に描き出すことは、中々困難である。上人は非常に多方面、多角形の人で、随分性格のわかりにくい人である。

覺如上人と蓮如上人

親鸞上人の滅後の眞宗は、一旦覺如上人によつて其の法燈が輝いた。否。本願寺の勢

力が其の基礎を得た。親鸞上人の門弟、信者は重もに關東に居たので、上人が京都小路の善法院で眼を眠るまで、所謂親鸞一流の信徒は、東國を中心として其の教を宣布して居たのである。さうして上人の弟子、眞佛上人の高田専修寺の一派は、確に此等關東に於ける、眞宗門徒中での、最も勢力ある、……想ふに當時の弟子、信徒等は上州野州から相模、武藏、其の他の國々に散在して居たので、固より纏まつた中心があつたといふわけではあるまいから、高田一派が、自分のみを上人の相續者だと思ふに過ぎるのは、少し言ひ過ぎた話であらうとは思ふが、少くとも關東で一番勢力のあるものと見做されて居たことは蓋し疑がない。之より後、北國地方に其の門流が傳播して、本願寺一流と、兩々相對立した事實を以ても之を知ることが出来る。さうして、本願寺をして、遂に此の高田一流を抑え、其の力遙に彼等の上に出でしむるに至つたは果して誰の力であるかといふと、誰人も指を先づ覺如上人に屈せざるを得ない。

關東は祖師親鸞上人宣教の跡である。北國越前は覺如上人が、足を踏み入れて、高田派と對立の端緒を開いた、ゆかしい故蹟である。斯くて覺如上人死後こゝに四代一百年、さしもの本願寺の法流も、水將さに涸れんかと疑はるゝ、衰微の様となつた時、こゝに中興蓮如上人は現はれたのである。上人は祖師に對する、限りなき渴仰者で、其の活動は、覺如上人と甚だ相似たる所がある。上人は關東に祖師の昔を偲び、北陸に覺師の爲を繰り返した。唯上人は、覺師以上の、實際的の手腕を有つて居られた。覺師は頗る學者風の所があつた。上人は寧ろ純粹の傳道者である。然し宗義の上にて、一隻眼を具した、所謂識見を有して居られた所は共に一樣である。

奮闘の八十餘年

上人の傳を調べて居る中に、深く我々の心を動かした點は、其の精力の偉大であること、活動の盛であることが先づ其の第一である。即ち親鸞上人の念佛再興のためには、

有らゆる手段方法を盡して、總べての障害と困難に打ち勝ち、其の卓拔な手腕を振つて、其の八十餘年の生涯を、全然奮闘に終つたのである。さうして親鸞上人の上では『御本書』といふ、むづかしい、高い所に封じこめられて居た傾きのあつた念佛が、上人によつて非常に容易いものになり、其の他力の説明も、一念の解釋も、手に取る様に、通俗化せられた。上人は、『教行信證』六軸、『六要鈔』表紙のやぶれ候ほど御覽じ候て、その後、御文を御作りなされ候」と『山科連署記』にある通り、上人は、『御本書』や、『六要』(覺如上人の子、存覺上人の『教行信證』を註解)を、反覆熟讀して、之を通俗的に脱化せしめたので、其の手腕は實に非凡なものである。上人は『御本書』の念佛を『御文』の念佛とした人である。…實は單に之を通俗化したとのみ言つたのでは、十分其の意を盡さない。之を通俗化する上に於て、上人には上人の宗義に對する一己の識見がある。此の識見は祖師の未だ發揮せざるところを發揮して居る。此の識見と、之を運用する手腕と、其の精力とは、實に眞宗をして今日あらしめた大なる理由である。

今日の眞宗は、親鸞上人の眞宗といふよりも、或は蓮如上人の眞宗といふ方が、當つて居るかも知れない。

(二)

『蓮如上人遺徳記』といふ書物は、上人の子蓮悟(善縁)の記述したものだといふが(實悟を執ら)其の記す所によると、上人は本願寺の七代、存如上人(圓)の長子として生れた人であるが、母は何處の何といふ人が明でない。一體此の『遺徳記』の出來たのは上人滅後二十餘年のことである。さうして之を著はしたものが、蓮悟で、蓮悟は、上人の亡くなられた時は三十二歳であるから、十分親のことは見聞して知つて居る筈である。…實悟は當時やつと八歳…然るに、上人の母は、全く不明で、上人六歳の時眞宗再興のことを懇ろに説き聞かせ、何處ともなく出て給うたので、觀音の化身であらうなど書いて居る。多分母親は、此の時に早く亡くなられたものか、或は離縁にても

なられたのを、神怪にするために、こんなことに書かれたものであらう。

四十三歳以後の活動

父存如上人の死なれたのは、上人四十三歳の時で、上人は此の歳になつて、始めて、本願寺八世の法統を嗣いだのである。上人の宗教的活動は此の後のとに属するのであるから、頗る晩成の方であると言はなければならぬ。上人の仕事が勇往邁進の中に、自ら老實で、堅持の風のあつたのは、一般の血氣盛な時代の活動者と違つて、其の年齢の、既に不惑以上の、思想の熟し切つた時代に始まつて居るがためでもあらうと思ふ。上人の少時は、随分艱難の中に人となられたものである。これ上人の性格の修養の上に、少からぬ影響を與へたものに相違ない。

肩のぬけたる衣

實悟の記述した『御一代聞書』には、

御貧く候て、古き綿を御とり候て、御一人ひろげ候事あり。又御衣は肩のぬけたるを召され候。白き御小袖は、美濃絹のわるきをもとめ、やう／＼一つめされ候。前々住上人(蓮如上人を指す、當時、上人の子、實如を)昔はこふくめをめされ候。白小袖とて御心やすく召候事も御座なく候由に候いよ／＼御かなしかりける事ども、折々御物語候。

とある。「肩のぬけたる衣」、「たつた一枚の白小袖」、これが上人の大谷本願寺の生活であつたのである。同じ書に、

よろづ御迷惑にて、油をめされ候はんにも、御用脚(錢のこと)なく候間、やう／＼京の黒木を、少しづつ御とり候て、聖教など御覽候よしに候。又少々は、月の光にても、聖教をあそばされ候。御足をも、大概、水にて御洗候。又二三日も、御膳まゐり候はぬ御事も候。由承りおよび候。

夜、燈す油もなく、月の光りて書物を讀む、時には召上るものさへ二三日も無つたことがあつたとは、随分悲惨である。

人をも、甲斐なくしく、めしつかはれ候はである上は、幼童の襦袢をも、御ひとり、御洗ひ候など、仰せられ候。

とあるのも、多分は、大谷在住、前半生涯中のことであらう。上人は、本願寺相續以前に於て、既に四人の子供がある。

本願寺の本堂は五間四面

大谷法統歴代の相續者と言へば、如何にも嚴かに聞えるが、其所謂本願寺なるものは大谷殿は、本堂阿彌陀堂三間四面、御影堂五間四面、小さく御入候つる事に候とあるから、當時は如何にも小さいものであつたに相違ない。然し親鸞上人以來の信徒はなほ關東北陸に残つて居つて、此の東山の大谷を本寺とし、遙々參詣もしたものと

であるから、まさか屋は漏り、軒は頽れるといふほど廢れて居たといふわけではあるまい。いや、既に「存如上人は、人を五人めしつかはれ候」ともあり、庫裡には、上段の間さへあつて、住職は、參詣者に、上段の間から對面を許した位だから、兎に角本願寺様の體面は、貧乏の中にも、どうかかうか相當に繕つて居たものに間違ひはない。然るに上人は、夜を照す油にも事を缺き、三度の食事も不自由勝であつたとは、どういふものであらうか。恐くは、六歳の時に既に生母に別れ、それより以後は、繼母の酷い取り扱ひの下に、みじめな半生を送られたものではなかつたらうか。「遺徳記」に「然るに其頃は、未だ一流の儀しかく」と知る人、多からざる間、他門他家の覺も幽微なり。しかれば常に人におそれ、世を憚り給へり。聖典を拜するにも、竊に人看を忍び、是を閱し給ふにも、或は隔壁の燈の、隙間より漏光を得、或は閑靜なる夜は、青香に澄る月暉をもて、文籍を披いて師釋に心をつくし「云々」とあるのは蓋し前の「御一代聞書」の油なくして月光に書を讀んだといふ事實を、形容して傳へたものであら

うが、これが單に他宗他家から、念佛を惡まれるのを憚つたのだとは、甚だ受け取りにくい。さすがに、『遺徳記』の著者も、繼母の虐待とは書き兼ねて、それこそ幽微な筆遣ひをしたものではないであらうか。

父存如上人は、長祿元年六月に六十二歳で終りを告げた。果して相續の問題は忽ちに紛起した。上人の弟妹は總べて七人ある。弟の應玄と蓮康とは共に繼母の腹である。されば繼母は、應玄(照蓮)に跡目相續をさすことにきめて、存如上人の葬式の時も、應玄が、主として之を執り行つたといふから、上人當時の境遇は之を察するに難くない。四十三歳の分別男が、其の繼母と其の弟との此の行爲を見て、何の不平も言はなかつたとは、一つは、上人の性格にもよらうが、たとひ之を言ひ出す人間であつたにしても、一つは、上人がよくくの日蔭者視せられて、表に出られなかつたといふ事情も十分あつたらうと思ふ。幸に叔父宣祐(存如上人の弟で、越前の)が、争つて、親戚どもの力で、上人はやつと相續者となることを得たのである。上人の育つた家庭は、斯くの如

く不愉快なるものであつた。然し上人は、此の不快と、苦痛と、貧窶との間に、其の人格を鍊り上げ、其の信念を養ひ得たものもあつたのであらう。

(三)

上人は、眞宗再興の大業を成就せられて後も、事毎に質素儉約を旨とし、

冥加のかたを本とせらる

何事にも「冥加」といふことを口にせられ、『實悟記』の中には、

蓮如上人の御時には、第一冥加のかたを本と被仰事にて候よし、各宿老申され候き。

かた／＼冥加を存ずべきにて候。云云。

「冥加のかた、專可存之由、前住蓮如上人仰候とて、實如上人仰事候き……今幼な者、成仁候はゞ、堅固可申聞之由、被仰置候由、皆々も被申事に候き」など

ともあつて「冥加」といふことは、實に蓮如上人以來の眞宗の規模である。上人は自己の幸福を思ふごとに、唯「如來の御恩」「祖師聖人の御恩」といふことを繰り返されたといふ。此の優しい、美しい生活は、恐くは、前半生の、萬苦の間に、育て成された所が、少くないであらうと思ふ。『御一代聞書』に、

御廊下を御とほり候て、紙切の落ちて候ひつるを御覽せられ、佛法領のものを、あだにするかやと仰せられ、兩の御手にて、御いたゞき候。

「佛法領のものを、あだにするかや」とは、實に優美な言葉ではあるまいか。

前々住上人仰せられ候。家を造り候とも、つぶりだに、ぬれずば、何ともかとも造るべし。萬事過分することを御嫌ひ候。衣裳等に至るまで、よきものを着んと思ふは浅ましき事なり。冥加を存じ、たゞ佛法を心にかけてよと仰せられ候。

ともある。又、「實悟記」には、

蓮如上人は如何なる極寒にも、御手水に水を御つかひ候。湯をまゐらせ候も、冥加

由被仰候き。あまり極寒の折節湯を少々、御手水の中へ、各ながし候て入れ候たる由に候。

近侍のものが、御氣の毒ぢやとあつて、そつと少し湯を加へて進めたといふのである。又佛前に出られる時は、如何なる極寒でも必ず衣服を全體着換へられたのであるが、近侍のものが、かなしがりて、之を暖めてさし上げると冥加を思召して殊にふるつて召されたといふことも、同じ「實悟記」に出て居る。「蓮如の御時は、毎夜座敷中のともし火、燈心を二筋ならでは、かきたてられず……冥加をおぼしめされたるによりたる事也」ともある。

感謝の生活

上人は、自己の生活を、總べて、佛と祖師とに任せ、其の御恩で、かゝる生涯を送ることを得るものとして、所謂「感謝の生活」を營んだのである。一片の紙も、なほ且つ

佛陀の賜はる所とし、佛法領のものとして之を無駄にすることを悲んだのである。「又佛物と思召候へば、御自身のめしものまでも、御足にあたり候へば、御いたゞき候。」といふのも、同じわけてあらう。「御膳まゐり候時には、御合掌ありて、如来聖人の御用にて、衣食よと仰られ候」、或は「物をきこしめし候にも如来聖人の御恩を御忘なしと仰られ候。一口きこしめしても、思召出され候よし仰られ候。」などいふ類ひのとは「實悟記」や「御一代聞書」には、一々擧げ盡くすことの出来ないほど記されて居る。斯くの如き「冥加」或は「感謝」の念の溢れて、外に現はれた、上人の「報恩主義」といふものは、素より深く其の信念に基いた行動であることは言ふまでもないが、上人前半生の境遇は、また上人の修練、修養の一朝一夕の故にあらずといふ、想像を禁ずることが出来ないのである。

(四)

上人が、本願寺の法統を相續せられた後も、久しい間は、たゞ逆境の苦みの中をくゞり抜いたのである。

大谷の襲撃

傳ふる所によれば、上人が、本願寺に住せらるゝ様になつてから、大谷に聚まる門徒の數も漸く増加し、上人の感化は、自ら念佛門の勢を盛ならしめるといふ有様であつたために、茲に叡山の疾視を受くる様になつたのだといふ。尤も上人は法統相續前、關東に祖師の舊跡を訪ひ、北陸にも其の流罪地、教化の跡を尋ねたことがあるから、大谷で以て、寛正二年に、祖師の二百年忌を修せられた時は、關東、北陸から門徒が盛に大谷に寄せて來て、此の時莊嚴の正門も成就したといふ。叡山の猜疑を招いたのは此の時であつて、爲めに、大谷は其の襲撃を受け、坊舎は火をつけて焼き拂はれ、上人は僅に免れて、江州に難を避けたのである。然しこゝでも、山僧の迫害は止まな

かつたが、其の間に於て、金森または堅田などの土地に教を説き、遂に寛正六年（大谷の年に就いては、異説があるが、今はしばらく寛正六年説を取）から文明三年まで六年間は、殆んど定住なき有様であつたのである。然るに、『御文』に、

文明第三、初夏上旬のころより、江州志賀郡、大津、三井、南別所邊より、なにとなく、不圖しのびいで、越前加賀、諸所を經廻せしめをはりぬ。云々

とある如く、所謂上人一代中の最も注目すべき、北國旅行は始まつたのである。

道俗男女吉崎の群集

上人の北國巡教は四年間であるが、主として越前の吉崎といふところに留まり、こゝが布教の中心となつたのであつた。『御文』に「當國細呂宜郷内、吉崎といふ、この在所すぐれておもしろきあひだ、年來虎狼のすみなれしこの山中をひきたいらげて、七月二十七日より、かたの如く、一字を建立して、昨日今日とすぎゆくほどに、はや三年

の春秋はあくりけり」とある。所謂「御山詣で」と稱して、此の吉崎に聚まり來る念佛の門徒の盛であつたことは、「當年より、事の外、加州、能登、越中、兩三ヶ國の間より、道俗男女群集を成して此の吉崎の山中に參詣せらるゝ面々の心中のとほり、いかにと心元なく候。幸に五里、十里の遠路をしるぎ、この雪の中に參詣のこゝろざしは、いかやうにこゝろえられたる心中ぞや。」といひ、「なかにも、ことに加賀、越中、能登、越後、信濃、出羽、奥州七ヶ國より、かの門下中、この高山へ道俗、男女、參詣をいたし、群集せしむるよし、其のきこえかくれなし、これ末代の不思議なり」などいあるので、思ひやらるゝのである。此の吉崎の布教以後が、即ち上人の最も光輝ある生活に入ることとなるのである。上人の選述として、『御本書』に次ぐ眞宗の大寶典たる『御文』は、八十通を五帖に分たれて居るが、其中、一帖から、三帖の初めまでの四十通、即ち半分は、北陸巡遊中に書かれたものである。北陸布教の注目すべきものたることは、之を以ても知ることが出来る。

吉崎の坊舎を退く

然るに文明七年八月に、上人は急に吉崎の坊舎を出て、船で若狭の小濱に遁れ、それより丹波から攝河泉の地方を中心として布教せらるゝこととなつた。此の上人が吉崎を遁れ出られたといふことには種々の事情がある。畢竟上人の吉崎布教の繁盛は、疑ひもなく白山権現をかつぐ天台宗の平泉寺を初めとし、其の他の諸宗の人々から、随分上人に非難を加へ、或は他宗を誹謗するとか、或は他の神佛を輕ろしめるとか、様々の難癖をあびせかける本となつたものであつたらしい。それに加賀では國主富樫政親が、高田派を保護して、吉崎派を排斥したため、二派の争論起り、上人の門徒は、國主の命に服せず、それに、政親の同族泰高といふものが、此の争を利用して、吉崎を助け、自ら加賀の守護たらんと企て、之がために上人は、政親に敵視せられたといふこともある。それから、越前では、太野の朝倉經景が、上人に反對して、平泉寺や、

豊原寺の僧侶を煽動し、吉崎を襲はしめんとしたといふ説もある。何れにしても、此等の事情が錯綜して、上人は遂に、越前退居と定まつたといふのであるが、之れに就いては、上人のために、萬事を周旋した、家司の下間安藝法眼蓮崇といふものが、上人の意志に反し、上人の命と稱して、種々奸才を弄し、かゝる騒動になつたので、安藝法眼は、之がために、「深き御勘當」を受けたと、「叢林集」などには出て居る。「御一代聞書」にも、「安藝蓮崇、國をくつがへし、くせごとに付て、御門徒をはなされ候。前々住上人、御病中に、御寺内へ参り、御詫言申候得共、とりつぎ人なく候し。」とある。此のことに就いては、一般の歴史家は、非常に上人の人格を非難し、北國の一揆は、全く上人の野心から出たものゝ様に論ずるのであるが、強ちに辯護するのでもないけれども、どうも上人の意に出たものといふことは、自分には信ぜられない。

一處不住の本分

攝津に來られて後は、攝河泉は言ふに及ばず、一方は紀州から一方播州に入り、それから大和に赴くといふ様に、近畿の土地に東馳西走し、やがて宇治の山科に本願寺を建てられたのが、六十五歳の時である。元來上人は「我一處不住にして生涯を果すべし」と言はれたと、『遺徳記』にある如くで、殆んど、一所に定住し、じつとして布教せらるゝといふよりも、生涯、足を摺り減らして奔せ廻り、席暖かなるに暇なきを自己の本分とせられたのであるから、一宗の中心として、本願寺といふものを建てるといふことは、上人の希望ではなかつたらしい。然し金森の善從といふ弟子の勧めによつて、終に參詣者の便利のために、こゝに建てるといふことに、きまつたのである。……恐くは江州と山城の交通の衝たる山科を選んだのは、善從の言にも、無論よつたものだらうが、一つは東國、北陸の信徒の便宜のためでもあらう。……上人の行動中最も面白いことは、其の所謂一處不住主義であつたと共に、其の代りに、何處にでも都合のよい所があれば、至る所にさゝやかな草庵を造つて、着々布教の根據を堅めた

といふことである。親鸞上人の時は、寺などは殊に建てないといふ主義であつたのが、蓮如上人は、全く之と正反對であつた。既に越前では吉崎の御坊が建ち、其の以前にも參河へ行つた時には土呂の本宗寺が建つて居る。攝津では富田の教行寺、河内では出口の光善寺、和泉では堺の信證院、それから山科の本坊建立後、播州では、英賀の本徳寺、大和では飯貝の本善寺、それから最後に石山本願寺——これは上人が隱居のために建てられた所で、最初は教恩院と言つたのである。上人滅後に、山科の本寺が法華一揆の爲めに焼かれて後、こゝが終に本寺となり、顯如上人の時、織田信長との所謂石山戦争で、大層人に知られて居るのである。此の外にも、上人に關係して創立せられた寺は、なほ多い様である。

(五)

上人は子供が非常に多い。其の配偶は四人ある。妾を蓄へられたかどうかは明でない。

或は子供の生れた順序から考へて見るのに、配偶に屢々分けられて、五度妻を迎へられたものかも知れない。子供は男女合して二十七人あつて、即ち左の如くである。

二十七人の子

- 一、順如(光助)——法嗣たりしも、父上人に先つて寂す。(上人二十八歳の子)
- 二、如慶(女子)
- 三、兼鎮(蓮乘)——加賀本泉寺、越中瑞泉寺兼住。祐宣の養子。(卅一歳の子)
- 四、良玉(女子)
- 五、兼祐(蓮綱)——加賀波佐谷、松岡寺及び鮎瀧房創立。(卅六歳の子)
- 六、壽尊(女子)
- 七、康兼(蓮誓)——加賀山田、光教寺、越中、中田坊等創立。(四十一歳の子)
- 以上、母は、下總守平貞房の女。法名如了。
- 八、實如(光兼)——九代の法統を嗣ぐ。(四十三歳の子)
- 九、妙宗(女子)
- 十、妙意(女子)
- 十一、如空(女子)

- 十二、祐心(女子)
- 十三、兼譽(蓮淳)——近江近松顯證寺住、後河内西證寺住、又伊勢長島顯證寺創立。(五十歳の子)
- 十四、了忍(女子)
- 十五、了如(女子)
- 十六、兼藤(蓮悟)——本泉寺住、又若松坊等住。『御一代開書』、『遺徳記』著者。(五十四歳の子)
- 十七、祐心(女子)
- 以上、母如了の妹、蓮祐。蓋し如了死後の繼室。
- 十八、如勝(女子)
- 以上、母、不明。
- 十九、蓮周(女子)
- 二十、兼秀(蓮藝)——富田教行寺、名譽教行寺兼住。(七十歳の子)
- 以上、母前參議藤原昌家の女、法名宗心。
- 廿一、妙祐(女子)
- 廿二、兼照(實賢)——近江堅田稱徳寺(後改慈敬寺)住。(七十六歳の子)
- 廿三、兼俊(實悟)——河内古橋、願得寺住。『實悟記』等の著者。(七十八歳の子)
- 廿四、兼性(實順)——河内西證寺住。(八十歳の子)
- 廿五、兼繼(實玄、後實孝)——飯貝本善寺住。(八十一歳の子)
- 廿六、妙宗(女子)

廿七、兼智(實從)——河内牧方、順興寺住。(八十四歳の子)

以上、母治部大輔源政榮女、法名蓮能。

上人は、至るところに寺を建て、其の建てた寺へはそれごとく其の子ども、或は孫などをそこへ置いて、其の土地々々の布教の中心としたのであるが、然し其の寺といふものも、決して堂々たる大伽藍ではない、ほんの實用的のもので、「つぶらだにぬれずば」の流で、唯こゝで布教さへ出来れば、それでよいといふ様なものであつたらう。祖師上人の「少し棟を高く」と言はれたのと大差なきものであつたに相違ない。山科の本坊さへも、もとの大谷の本坊と同じ様に、本堂は三間四面、御影堂は、五間四面に過ぎなかつたといふのを以ても、之を知ることが出来る。最後に、隠居のため建てられた、大阪の石山の寺でも、其の大寺院となつたのは、確に上人滅後のことであつたらうと信ぜられる。

人はかるくとしたるがよし

上人は報恩感謝の心で、萬事を處し、冥加々々を口にして居られたといふのであるから、如何にも優しい——柔弱な人との想像される様であるけれど、決してさうではない。上人は極めて、快濶な、淡泊な人で、竹を割つた様な、蟻まりのない、勢のよいといふ風を好まれたのである。「御一代聞書」に、

蓮如上人仰られ候。世間佛法ともに、人はかるくとしたるが、よさと仰られ候。黙したるものを、御さらひ候。物を申さぬが、わろさと仰られ候。又微音に物を申を、わろしと仰られ候と。云。

とある。信仰を話し合ふ時でも、はさりと話をせぬのは、自己の考を以て飾らんと思案するので、偽りだといふことも言はれて居る。上人は、非常に虚偽、偽善を惡まられて、善でも、惡でも皆さらけ出すといふ流儀であつたのである。

衣紋正しき殊勝の御僧

上人は、眞宗興隆の足しにすることならば、自分の良心の許す限りは、殆んどどんなことでもしたといふ傾きがある。今から見れば、これほどにやらなくとも、思はれる點もないではないが、然し上人は毫しも隠しも何もせぬ、極めて大びらにやつたので、勿論疚しい所はなかつたのである。「方便をわろしといふことはあるまじきなり」と『御一代聞書』にある通りで、上人は、明白に方便主義を執つたのである。然し、同じ書に、

蓮如上人、無紋のものを着ることを御さらひ候。殊勝さうに見ゆるとの仰に候。又墨の黒き衣を着候を御さらひ候。墨のくろき衣を着て、御前へ參れば、仰せられ候。衣紋たゞしき、殊勝の御僧の御出候と仰られ候て、いや、我は殊勝にもなし、たゞ彌陀の本願殊勝なる由仰られ候。

とある如く、如何に殊勝面を装ふ當時の偽善者を悪まれたことの、烈しかつたことがわかるのである。「御文」に、「すでに、牛を盗みたる人といはるとも、當流のすがたを見ゆべからずとこそ、おほせられたり」…これは、祖師が「たとひ牛盗人と言はるとも、若しは善人、若しは後世者、若しは佛法者と見ゆるやうに振舞ふべからず」と言はれたと『改邪鈔』にあるのによられたのであるが、畢竟する所、上人の布教手段は、事によると、非常に俗な、政略家のやり方の様に、思はれるふしもないではないが、然し上人にあつては、それが寧ろ素朴な、率直な方便主義で、少しも後暗い政略を用ひたのではなかつたのである。

情で書かれた曲線の文

我々が蓮如上人の『御文』を読んで、先づ大に感ずることは其の文章の妙である。…漢文の方では、古來高僧の中にも、随分立派な文章を書いた祖師方は少くない。傳教、弘法を始として、道元禪師の如きも、其の著しいものであらう。然し國文の方では、どうしても、日蓮上人と蓮如上人を、雙璧として推さざるを得ないと思ふ。…尤も

此の外にも、浄土宗の向阿上人の『三部假名鈔』であるとか、或は近くは白隠禪師の文の様な、皆これ模範的の妙文ではあるが：：日蓮上人の文は、意氣で書いて居る直線的の文であるが、蓮如上人の文は、情で書いて居る曲線的の文である。一例として「大阪の御文」をこゝに引かうならば、

抑當國攝州東成郡、生玉の庄内、大阪といふ在所は、往古より、いかなる約束のありけるにや、さんぬる明應第五の秋下旬のころより、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでに、かたの如く、一字の坊舎を建立せしめ、當年は、はや三年の歳霜をへたりき。これすなはち、往昔の宿縁、あざからざる因縁なりとおぼえはんべりぬ。それについて、この在所に居住せしむる根元は、あながちに一生涯をこゝろやすくすごし、榮花榮耀をこのみ、また花鳥風月にもこゝろをよせず、あはれ無上菩提のためには、信心決定の行者も繁昌せしめ、念佛をもまうさんともがらも、出来せしむるやうあれかしとおもふ一念のこゝろさしをはこぶばかりなり。……

實にふつくりとした、寛かに温みのある文章の味ひは、何とも言ひ様がない所がある。

きらりと喰ひ入りし草鞋の跡

上人の大阪に隠居されたのは、此の文によつて、明應五年即ち八十二歳の時であることを知るのであるが、上人は之を以て、中興の業を全うし、功成り名遂げて身退くものであると言はれたといふが、然し決して、普通の隠居ではない。

蓮如上人、細々、御兄弟衆等に、御足を御見せ候。御わらじの、緒、くひ入り、きらりと御入り候。かやうに京田舎、御自身に御辛勞候て、佛法を仰せをかれ候由、仰られ候しと云。

此の活動の精神は、八十餘の老軀になつても、未だ決して銷磨せざるものがあつたのである。

(六)

蓮如上人は、其の門徒に對し、飽くまで平民主義であつて、其の布教の手段も、一切下層の無知の社會まで徹する道を講ぜられたのである。其の自己を處するに於て、儉素節約、生涯「頭だにぬれずば」のさゝやかな堂宇を住居とし、一處不住の草鞋ばさでかけあるいたのも、其の安心の奥義を平易簡明な「御文」に残されたのも、皆此の平民主義の表現に外ならぬのである。「御文」の文章の光彩のあるのは、一つは其の文體の頗る通俗的——即ち平民的で、しかも毫しも卑しい所がないといふ所にある。此の位、通俗的で、此の位、品のよい文章は、或は日本文學史上、唯一と言つてもよいかも知れない。——文章がさうであるばかりではない、文章がさうであるのは、つまり思想がさうであるからである。「御文」の中には、「一文不知の尼入道」相手の彌陀本願の根本から出た平民主義の思想は、全篇に充ち満ちて居る。

御同朋、御同行

『御文』の第一帖の第一通に、「嘆異鈔」の、「親鸞は弟子一人も、もたず候。」の文を引き「その外は、何を教へて弟子と言はんぞと仰せられつるなり。されば、とも同行なるべきものなり。これによりて、聖人は、御同朋御同行とこそ、かしづきて仰せられり。」と言はれてある。『御一代聞書』には、
 仰に、身をすて、平座にて、みなと同座するをば、聖人の仰せにも、四海の信心の人は、皆兄弟と仰られたれば、我も其の言の如くなり。また同座をもしてあらば、不審なることも問へかし、信をよくとれかしと、願ふばかりなりと仰せられ候なり。
 とある。『實悟記』によると、

昔は、東山に御座候時より、御亭は上段御入候。蓮如上人の御時、上段をさげられ、下段と同様に、平座にさせられ候。其故は、佛教を御ひろめ、御勸化につきては、

蓮如上人

上臈ふるまひにてはあるべからず、下座ちかく萬民を御誘引あるべき故は、いかにもく、下座ちかく、諸人をちかく召て、御すゝめ有べきとの御事にて候と被仰候て、平座に御沙汰候。

とある。上臈振舞とは、即ち貴族振舞である。上人は萬事に就いて斯くの如くであつたから、其の門徒、信徒に對する態度も極めて親切で、出来るだけ之を歡待したものである。門徒のものが上洛をすれば、「寒天には御酒のかんをよくさせられて、路次の寒さをも忘れ候様にと仰られ候。又炎天の時は、酒などひやせと仰られ候。御詞を和られ候」とも、「開山上人の一大事の御客人と申は、御門徒衆のことなり。」とも、開山聖人の御同朋、御同行とかしづかれし門徒に對し、「聊爾に存するはくせごとの由仰られ候」ともあつて、殆んど媚びる程に親切を盡されたものである。嘗て上人一日、順誓に對し、「お前と私は兄弟ぢや」と言はれたので、「勿體ないことを」といふと、「信を得つれば、さきに生るゝ者は兄、後に生るゝものは弟よ、法敬のこととは兄弟よ」と言

はれたとある。上人は、親鸞上人の御同朋、御同行主義、弟子一人ももたずの流儀を、最も嚴肅に守られたものである。

王法は額に佛法は内心に

蓮如上人の「御文」は、親鸞上人の教義を、「後生助け給へと一心に彌陀をたのめ」の一言に盡きた、極めて簡明の教義とし……他力教の生粹を、簡單の一言で、誰にでもわかる平易簡明なものに、鍛え直し、之と同時に、佛法、王法と並べて、宗教と道徳とを雙輪の主義としたのは、實に上人の特色——「御文」眞宗の特色である。眞宗の他力教と世俗生活との間に、密接の關係を有せしめた點は、確に親鸞上人の上では、未だ決して明ではなかつたのである。心には佛法を信じ、身には王法仁義を行へとは、實に上人の主義であつたのである。「王法は額にあてよ、佛法は内心に深く蓄へよ」とか「佛法をあるじとし、世間を客人とせよといへり。佛法の上より、世間のことは、時にし

たがひ、相はたらくべきことなり。「などいふの名言は、皆上人の佛法、世法の關係を示されたるものである。

一流再興満足の往生

要するに蓮如上人の生涯は、實に奮闘の生涯である。前半生は、貧と窮境とに苦闘し、本願寺相續以來は、他宗の迫害、國司武人の壓迫を受け、將さに消ゆるに垂んとせる法燈を、草鞋の緒に、くひ入りし足を東西に運んで、寧處なき活動に、漸く高々と之を世にかゝげ、八十五歳の終りに至るまで、最も公明率直な方便主義、最も優しい冥加報恩主義、最も通俗にして親切な平民主義を着々として實現し、——内は、親鸞上人の正義に反する、秘事法門等の異義者を、彈呵糾正し、——此の快活にして強い、しかも溫柔にして穩かな上人は、「我は我が天職を盡し得たり」との満足の中に、明應八年三月廿五日、八十五歳にして此の世を見捨てられた。「遺徳記」に、「昔は小屋の

貧窓をトめ、窮窟すといへども、誠に聖人の一流再興の志徹せしに依て、今眞宗弘まり、末弟安穩に住する事、偏に我矜哀の念力によりてなりと御自證ありけり」とも「幼年より、佛法興隆の志あるが故に、身の苦を顧みず、心の悲を痛まず、都鄙の間に劬勞せしが故に、今聖人の御用に依て、心安く満足の體たり。」ともいひ、「御一代聞書」にも、「御代に、佛法を是非とも、御再興あらんと思召候御念力一つにて、かやうに今まで、皆々心やすくあることは、此法師が冥加に叶によりてのことなりと、御自讚ありと云。」とある。上人最後の眠りの平安と満足とを思ふに足るであらう。

白隠禪師

(一)

徳川時代に於て、一旦衰滅に傾きかけた、臨濟正宗の復興者たる、白隠禪師のことを簡単に御話を致します……年譜流に、何年に生れて、何年に何所其所へ行つて、何をしたといふ様な細かいことは、こゝでいふ目的ではない。なるたけさういふ類のことを略して、たゞ大體の話であります。

日本臨濟禪の由來

全體この臨濟宗の最も日本で盛であつたのは、鎌倉時代から足利時代の中頃までの間で、略ぼ二百年をこゝのことでありまじやう。例の榮西禪師が、始めて禪を傳へて

來たといふが、然し臨濟禪の盛になつたのは、榮西の孫弟子の聖一國師が、支那で嗣法して還り、又鎌倉へ來た蘭溪道隆禪師、即ち大覺禪師——此の人は建長寺の開山である。それから少し後れて來たのが、圓覺寺の開山で、無學祖元禪師、即ち佛光禪師——、マアかういふ様な人々が來てからであると言つてもよからうと思ふ。

御承知の如く禪宗は唐の時代に段々派の様なものが別れて遂に五派となつたのである。其の中で日本に傳はつたのは、臨濟と曹洞の二派である——。雲門、潯仰、法眼の三宗は、日本には傳はらない——。臨濟宗は、宋の時代になつて、楊岐方會と黃龍惠南といふ人がある、此の二人の系統が最も榮えたのであるが、二派共に日本には傳はつたのである。然し黃龍派は、僅に榮西禪師が之を傳へて來たゞけで、あとは専ら楊岐派のみ、獨り日本には傳播したのである。榮西禪師は黃龍から八代目の法嗣たる、虛菴懷徹の法を承けて來たものだといふことである。

榮西禪師は元來叡山の房さんで、殊に台密に精通し、既に葉上流といふ一流を開いて

居る位の人であつて——、此の葉上流の灌頂を授ける灌室は尾張の密藏院にあるといふ——。随つて、其の弟子だちも、決して純粹の禪ではない。例へば、上野の長樂寺を開いた榮朝も、長樂寺に禪と共に密教を傳へたのであるし、鎌倉の壽福寺に居つた行勇禪師も、鶴岡八幡の社僧となり、鎌倉幕府の祈禱僧であつたし、且つ高野山に、金剛三昧院といふ寺を建て、密教と共に禪を弘めたのである。聖一國師は、もと矢張り榮西禪師の門下なる榮朝の下から出た人であるから、矢張り密教に關係のある人で、『大日經』の註を著して居るが、然し禪の方は支那へ行つて、無準師範の法を嗣いで來て居るので、此の無準といふ人は楊岐派の人である。日本に傳へられた系統では、此の無準の嗣法者が最も多いのである。

應燈關の系統

支那人で、親しく禪宗を日本に傳へた人の中で、建長寺の大覺禪師……此の人の下か

ら出た人で、最も著名なのが、大應國師である。大應國師は、即ち南浦紹明で、法は、支那へ行つて、黃龍派の虛堂智愚禪師に嗣いで來たのである。其の弟子が大徳寺の開山なる大燈國師——宗峰妙超で、其の弟子が關山慧玄、即ち妙心寺の開山たる無相大師である。

佛光禪師の弟子としては佛國國師即ち高峰顯日禪師がある。此の人は、後嵯峨天皇の皇子で、天龍寺の開山として有名な夢窓國師は、即ち其の法嗣である。佛國國師は、恰も大應國師同時の人で、大應國師が、筑前の横嶽崇福寺に居つた頃は、下野奈須の雲巖寺に居り、東西に其の法聲を振へりと言はれた。夢窓國師は足利尊氏の歸依の頗る深かつた人で、北朝の花園、崇光、光明諸院の尊崇を受けたのであつたが、同時に大燈國師は、最も心を南朝に寄せて居つたものだといふ。斯くの如く此の頃の臨濟宗は、殆んど、大應と佛光との二系統相對して法燈を挑ぐるの有様であつたが、然し後に榮えた臨濟宗は、全く應、燈、關三師の末に屬するもので、白隱禪師再興の臨濟

禪は即ちこれである。應燈關は大應、大燈、關山の三國師を指したのである。

(二)

白隠禪師は、關山國師：近頃になつて無相大師の宣下があつたのである。丁度十六代目の法孫に當る道鏡惠端禪師の法を嗣いだ人であつて、惠端禪師は、信州飯山の正受庵に居つたので、正受老人として、普く知られて居る人である。此の正受老人が、實に一通りの人でない。白隠をして白隠たらしめたものは、全く正受老人の力である。正受老人が、白隠禪師を接得したやり方の、峻嚴であつたことは、實に昔の臨濟禪師の棒喝も、之には及ばじと思はるゝ程である。白隠禪師は、蓋し此の烈しい鉗鎚の下からこしらへ上げられた人なのである。

四條河原の捨身

白隠禪師が、自ら自分の傳を書かれた『壁生草』を見ると、中にかういふことがある。昔大師(大燈國師)毎夜四條河原に出で單座せらる。其頃京童の游俠者共、五箇三箇宛、此處彼しここに集どひ寄り、腰の物の利鈍を矯めし試みんが爲めに、處々の廣野、河原の邊を馳せ廻はり、乞食非人の類を斬り倒すこと數を知らず。四條河原も、五人竊に來り、大師の單座せらるゝを見付け、是れ究竟の事に社あれ、我は一の太刀、汝は第二と通り合ひけれども、少しも恐れ給はず、安祥不動端坐せらる。一士あり、つくづく大師を見て手を合せ、斯る殊勝の道人を殺害し奉るとも、さのみ適れ名作の打物なりと、稱せらるべき證據にもならじ、結句吾々が罪過の程こそ恐ろしけれとて、諸共に打ち捨て走り出でぬ。其の時大師に御詠あり「憂き事の猶も我身に積れかし、捨てし心の誠をや見ん」と、寔に千歳の美談ならずや。さる程に、大徳の名藍を開き本有圓成關山國師を打出し給へ、亦是れ光明盛大、刻苦の功なり。

これは所謂大燈國師の、四條河原捨身の傳説で、國師は、後醍醐天皇の師として、大徳寺の開山として、天下崇仰の大徳であつたが、其の衆を接するの手段は、頗る峻烈を極めたものであつたといふことである。随つて、自己の身を處するにも、決して王公貴人の師を以て居らない、非常に平民的であつた様であるが、此の河原捨身の話の如きは、また以て其の家風の一をと、窺ふに足るべきものである。

欄板を毀撤せば猶餘薪あらん

其の下に打出されたといふ、本有圓成關山國師も、道風甚だ高く、一時世塵を避け、飄然大徳寺を出で、行脚巡遊して美濃國の伊深の山に隠れ、名譽利慾の巷を遁れて、百姓樵夫を相手とし、道を樂んで居られたのであるが、大燈國師入寂の時に「禪師百歳の後、誰か其の跡を嗣いで朕が參玄の師たるべきものぞ」との、花園上皇の御下問によつて、國師は「惠玄こそ」と申し上げたので、それから、關山國師の住所搜索の結

果、之を伊深に發見し、辭すれども許し給はず、強ひて京都に迎へて、花園の離宮を捨て、國師を開山祖とし給ひしものだといふことである。妙心に住した後も、恬淡洒脱、其の生活は、毫も山寺の質素な生活と異つた所はなかつた様である。夢窓國師が、一日妙心寺の門前を通ると……、いづれ供揃で、乗物かなんか堂々と通つたものであらう。其の時關山國師が、頻りと、門内で、作務といふから多分草撈でもして居つたものであらう。之を見た夢窓國師は「我が兒孫は、遂に絶え、關山の後は榮えるだらう」と言はれたといふ話があるが、説の眞偽はわからないけれ共、國師の高風、消息の一端を漏すものと言つてよいであらう。一切威儀典禮に拘はらず、住居や衣服、生活の用度などには更に顧みる所なく、唯向上の一着を以て四來を接得すとある。屋根は朽ち、庇は傾いても、安然として修復を許さず、浴主が「最早薪が無くなりました」といふと、「欄板を毀撤せば猶餘薪あらん」軒板を取り毀したらまだ大部ある筈ぢやといふのである。身に着くるところは唯一着の麻衣、袈裟には藤蔓の環を附

けたとある。此の恬淡拘はらざる生活の間にも、衆を接する一事に至つては峻烈嚴厲大用大機の徒にあらずんば、到底近くことを許されなかつた。一日大雨烈しく、屋根から漏り来る雨は瀧の様、「早く何か持つて来よ」といふと、小僧が、急いで箆桶をもつて来た。すると其の時禪師は、「此の鈍顛預(大面、おぼづ)、箆桶が何の役に立つものぞ」と叱られ、一人の小僧が、箆桶を持つて来たのを非常に賞められたといふ話が傳はつて居る。丹霞の天然禪師が、佛像を焼いて、寒時暖を取つたといふと一般、禪師活作略の窺知すべからざるところは實にこゝにあるのである。

打出せらるゝこと二十五度

禪師は最初大應國師にも參じたが、大應寂後、其の高足の大燈國師に謁し、大燈死後、會下の衆、皆禪師の左右に隨ふこととなり、一時に二百餘人の多きに及んだといふが、然し大燈下でも、既に舊參十六人中の上首と稱せられた、雲山宗岷の如き、打出せら

るゝこと二十五度に及び、終に許されなかつたといふのを見ても、其の家風を想見することが出来やう。一日或る僧來り參ず、禪師、之を罵る。時に僧の言ふ「某甲、生死事大を思ひ、來り參見を願ふのに、いきなり、怒罵し給ふは如何に」と、禪師は「我が這裏生死なし」と言つて一言の下に追ひ出してしまつた。斯くの如き有様であつたから、其の參玄のもの數知れぬほど多くあつたであらうが、印可を得たものは、僅に授翁宗弼一人であつたといふ。

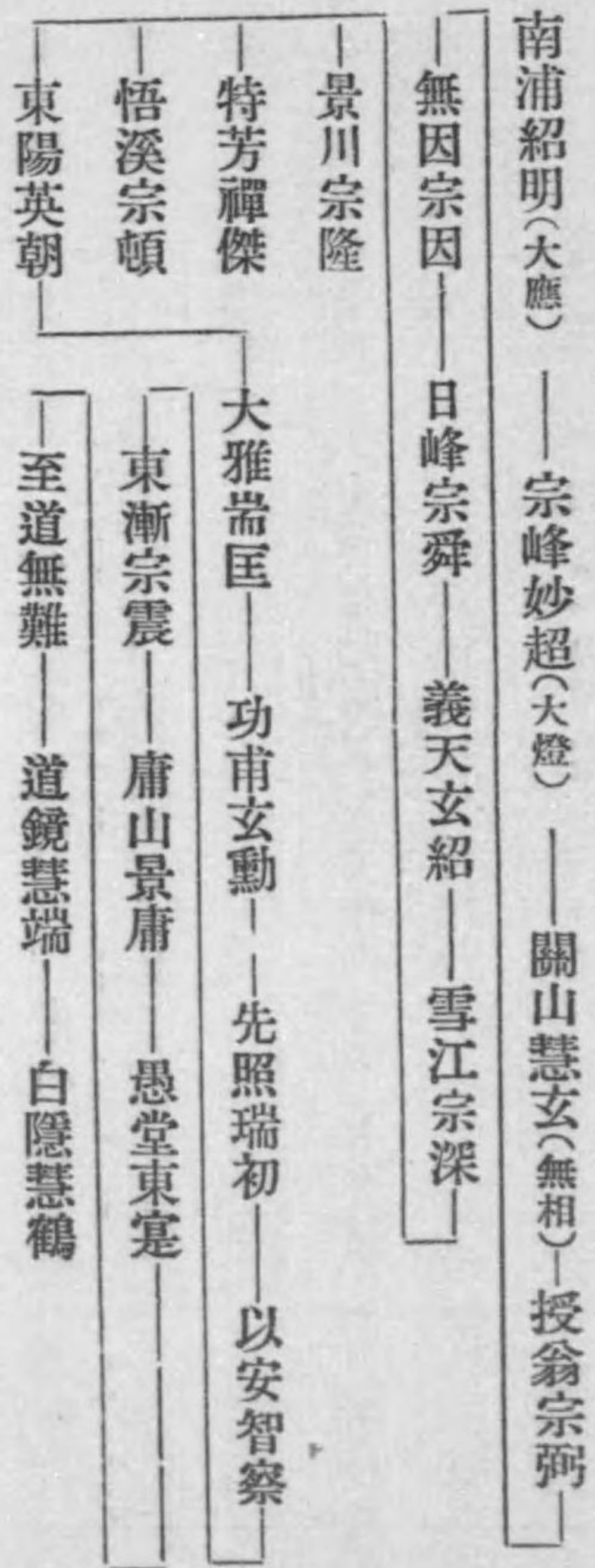
著書もなければ語録もない。唯大燈國師の語録を纂輯せられたのみである。嘗て道州和尚の「如何是祖師西來意」といふ問に對し、「庭前柏樹子」と答へられたといふ有名な公案、…此の公案を提唱せられて、「柏樹子話、有賊機」と言はれたといふことが傳つて居つて、凡そ禪師の語として録したものは唯此の一つである。黄檗の隱元禪師が妙心寺に行かれた時に、關山の語録を尋ねられたが、語録といふものはない、唯傳記中に、此の「柏樹子話有賊機」の一語を得て、百卷の語録にも優ると言つて、禮

拜して歸られたとあるが、禪師の禪師たる所は——此の無言無語、しかも臨濟玄風の眞面目を百世に維く實際の手段にあつたのである。さればこそ北條氏より足利氏まで、臨濟禪の系統二十派といふ中で、獨り禪師の末裔後代に繁榮するの運に會ふ、故ありと言はなければならぬ。

峻峭惡辣の宗格

授翁から以後、此の系統は雪江宗深和尚の下で四派に分れた。雪江は義天和和尚の法を嗣いだ人であるが、義天またなか／＼辛辣の手段を弄した人であつたと見え、これまた容易に人に許さない。宗深が印證を得たのは、義天の示寂の時であつた。しかも嗣法は、唯宗深一人であつたといふのである。雪江和尚には法嗣が四人ある。即ち景川宗隆、(龍川)、特芳禪傑(派)、悟溪宗頓(派)、東陽英朝(派)で、これ所謂妙心四派の根元である。白隱禪師は、此の四派の中で、聖澤派の系統に出た人で、其の受法の

師は、正受老人、即ち道鏡慧端和尚である。大燈、關山の禪風、其の峻峭惡辣の宗格は、蓋し其の由來する所甚だ遠きを見るのである。



全身皆蚊子、櫻桃の實の如し

『壁生草』に、またかういふことが書いてある。

昔大圓寶鑑國師、妙心聖澤の庸山老師に調す、問答脱洒ならざることあり、山大に怒

罵して呵咄す。師、憤らず、山後の石上に死坐す。蚊子大に集まりて、道情を妨ぐ。師、衣袍を解いて、寸絲も掛けず、裸形兀坐して夜を徹す。蚊子聚まりて肌膚を咬む、其苦、其惱、説くべからず。師、轉た梁骨を堅起して湛然たり、恰も一人と萬人と戦ふが如し。覺えず大死一番、身心脱落、忽然として大得脱あり。天明、眼を開けば、全身皆蚊子、徐々に掃ひ落せば、櫻桃の實の如し。歡喜、手の舞ひ、足の踏む事を知らず、歸り來り、山に謁して具に所見を演ぶ。山、隨喜の餘り、背後を撫して印可證明す。

此の大圓寶鑑國師は、即ち愚堂和尚である。其の法を嗣いだのが、無難和尚で、即ち正受老人である。

狼群の中に端然坐定

吾が正受端老漢の如きは、當時飯山檣澤邊に樵夫あり、山に入りて狼の子を拾ひ得

來り、飯を與へて寵愛す。一日樵夫、山に入りて大木を截る。狼子慕ひ來りて其傍に臥す。俄然、木倒れて狼子の上に落ち、無残にも狼子を粉碎し了る。樵夫一見、驚き悲むと雖、力の及ぶべきことにあらず、空しく捨て、家に歸る。其の夜より、國中の狼ども、群り集り、毎夜村中に入り亂れ、人家を襲ひ、四五歳、六七歳の兒女を引き出し、咬み殺し、食ひ裂き、宛をなすこと限りなし。之に依りて、村中日暮に及んでは、盡く門戸を閉ぢて出入せず、全く人跡の往來も絶えたり。時に正受老漢、彼の宗峰妙超大師が、四條河原に於て捨身し給ふことを思ひ出し、是れが、道情の強弱を試むるの好時節なりと、中に就いて、狼狗の多く寄り聚まる處を擇び、單坐を設け、誓つて七日の接心を爲す。果然、夜來狼狗夥しく、聲を擧げ、牙を鳴らして來ること數なし。或は二つ三つ打ち連れ、頭上を飛び越すあり、或は喉頭を吹き嗅ぐあり、背後を突き動すものあり、腰脚足心の間に觸着するあり、千態萬狀、膽冷え、股戦くと雖、中間少しも動搖せず、却つて歡喜の得力あり、七夜を

満ずるに到りて、終に恙なかりきと。是れ正受が、一夜予に對して、親しく茶話せられしものなり。

これも、白隠禪師が、『壁生草』に、自ら書かれた所である。——高邁隱逸の風、苦修精練の力、孤硬聳峻の禪、此の三つが、人をして言ふべからざる、高い、尊い、眞風を欽仰するに堪へざらしむるもの、これ洵に妙心一系の禪である。白隠禪師は、實に此の禪を徳川の中世に宣揚して、臨濟禪中興の名を得た人である。

(三)

臨濟禪は、足利の末頃から段々衰へて、徳川氏の初め頃までは、どうやらかうやら一縷の命脈を繼いで居るといふ丈で、其の禪風殆んど跡を絶たんとするの有様にあつたものである。此の際に於て獨り妙心禪の正系を承け、一方に雄視して居つたものは實に至道無難禪師である。

愚堂を送つて其のまゝ江戸へ

此の人は濃洲關原の人で、愚堂東寔和尚が、東西往來の途次、始終此の家に宿つたので、早くから愚堂和尚に參じ、頗る出家の志があつたけれども、繼嗣のないので、家系を絶つわけには行かない、爲めに其の本意を遂げることが出来ずに居たといふことである。ところが一日愚堂和尚が、其家に過ぎると、主人は不在である。家族のものゝ言ふには、家の主人は、近來非常に大酒を嗜み、亂暴狼藉、如何とも致し方が御座ません、どうか貴僧から、篤と御説諭を願ひたいといふ話である。和尚は宜しいといふので、酒肴の用意を命じ、歸るを遅しと俟つて居るといふと、夜中に果して門を叩いてやつて來た。這入るや否や、怒罵叫呼、上下を叱責する聲、成程手もつけられない。そこへ愚堂が出て行つて、不意に「ヤア御變りはないかな」といふ聲に、さすがの主人も、大に驚いて、「これはく」といふので、座敷に來て互に挨拶をする。「時

に老僧は今回都合あつて遠方へ参らなければならぬことに相成つた。就いて今晚は永訣の盃を酌まうと心得て、實は先刻より御俵ち受けを致して居つたわけである」といふので、やがて杯を主人にさし、なみく／＼と注いで、「さて聞くところによれば、お前は近來非常に大酒を嗜み、人々に迷惑をかけるさうぢやが、お前も男子であらう、一旦志を決し、断じて今後は酒を止めよ、今晚これが最後であると心得、十分に酔ふがよいぞ」と言はれると、主人は頭を下げて、「これは私の素より願ふ所で御座ます、和尚様、唯今の御言葉をお忘れ下さいませ」と言つて、これから一と晩夜通し飲み明し、夜が明けた、愈和尚が立出といふことになると、主人は、「私も御送りを致しませう」といふので、幾里も幾里もついて来る、「もうこれでよい、家に還るがよからう」と言ふと「なに、家には最早跡つきも出来ましたので、別に心配は御さいません」と言ひ、どこまで行つても還らうとはしない、別に旅装束もせず、家から出た其のまゝで、到頭江戸までついて来てしまひ、自分で頭を剃りこぼち、和尚の前

に来て、「久しく願ひ居りました本望を今日漸く達しました」と言つて御辭儀をした。和尚も致し方なく遂に得度を許したといふ。此の泥醉漢の成りあがりこそは、實に至道無難禪師であります。其の出家を願ふの餘り、繼嗣の出来たのを幸ひ、家族にあきられる手段として大酒亂酔をやつたものと見える。麻布の東北寺に居り、自ら至道庵主と稱した。荻野獨園和尚の『近世禪林僧寶傳』に、其の傳を立て、「師、庵中不_レ拘_ニ繩墨_、不_レ貯_ニ衣具_、門庭峭峻、宗風孤危、衲子望_テ崖而退」と言つて居るが、所謂妙心一派の正風、歴々として目に見える様である。會下に参じたものも、非常に多かつたけれども、其の法を嗣いだものは、實に道鏡惠端禪師、唯一人であつたのである。自ら嘗て其の像に賛し

葦原や絶えて久しき法の道を

踏み分けたるは此の翁かな

と言つて居る。また以て其の抱負を見るべきであらう。

萬事抛下の四十年

惠端禪師は信州飯山の人で、飯山侯の庶子だといふことである。無難和尚に東北菴に參じたのが十九の時、それから諸方を歴參し、再び江戸に還つた時には、無難和尚は、是非とも自分の跡を繼がして、江戸に居らしめやうとしたのであるけれども、専ら山林に隠れんと欲すと言つて、固辭して飯山に歸り、楢澤といふ所に、正受菴といふ庵を結んでこゝに居つたので、人呼んで正受老人と言つたのである。『近世禪林僧寶傳』には、禪師の言を引いて、

まことに保ち難く、持し難きは正念工夫の大事也。澆季の弊風、惟名利の心熾に、間道相を現するものありと雖、而も正念工夫決定の人は、即ち實に得難し、況んや正念工夫相續不斷の人を求むるをや。老僧十三歳の時、始めて此事あるを知り、十六歳にして娘生の面目を打破し、十九歳にして出家し、無難禪師に隨從し、他の毒

手に觸るゝもの殆んど十餘年、却後此の山に隱遁し、今既に七十に向ふ。中間四十年、萬事を抛下し、世縁を杜絶し、專一に護持將來す。茲に五六年來、纔に正念工夫を眞箇に相續することを覺得せり。若しそれ檀那に追從し、施主に諂媚し、名利を希望し、財穀を貪求し、而して佛祖の境界に到らんと欲するものは、寔に笑ふべきのみ。

と言つて居る。山中狼群の間に端坐したといふ、其の話一つでも、一家の風を想望することが出来る様である。

(四)

白隱禪師は駿州浮島の人で、相當の家に生れたものである。傳記の詳なることは略すこととして、最初十一の時に日蓮宗の坊さんの説教に地獄の話聞いて、サ、恐ろしくつてたまらない、どうしたならば死後此の恐ろしい地獄の苦を逃れることが出来

るであらうと思ひ、日夜心配に堪へなかつた。これが抑も其の出家の動機になつたものだといふ。それから或る時、線人形の芝居を見ると、恰度日蓮宗の日親上人の傳を演じた。日親上人は、例の足利義教のために、真紅に焼けてる鍋を冠せられ、「どうだ法華の行者でも熱からう」と言はれると、上人は從容として、「眞の行者は火も焼くことは出来ない、水も溺らすことは出来ない」と言つて笑つて居つたといふ有名な、所謂鍋冠り日親上人と言はるゝ人である。禪師は此の人形芝居を見て、非常に感憤し成程此の位の人になつたらば、地獄の火も熱くはあるまいと思ひ、愈出家修行の念を起し、母に無理に願ひ、十五の時に、遂に松蔭寺の單嶺といふ人の弟子になつて、禪宗の坊さんになつたのである。

『法華』に失望

それから間もなく、『法華經』を讀んで、大に失望をした。『法華經』は、佛一代の説法中、

最も高遠深妙のものと聞いて居た、之を讀んだらば、所謂火にも焼かれず、水にも溺らされぬ、何等かの暗示を得るものと思つて讀んだらしい。然るに最後に至るまで、唯因縁話や、譬喩譚で、どこに『法華經』の眞價があるのか、更にわからない、佛經といふものは、實につまらないものだと思つた。然し禪宗はまた教外別傳といふから、何か、別の消息があらうと思ひ、十九の春から松蔭寺を出て、諸方歴參の途に就いた。

巖頭の末後に大疑あり

或時『五家正宗贊』を開いて、巖頭全歳の傳を讀んだ。巖頭は雪峰義存といふ人と共に、徳山宣鑒の下に出た禪匠で、

一日、衆に謂て曰く、老漢去る時、大叫一聲了去らんと。一日賊大に至る、責むるに鎖を供するなきを以てす。遂に刃を刺む。師神色自若、大叫一聲して終る。聲數十里に聞ゆ。唐の光啓三年四月八日なり。

と『正宗贊』にある人で、此の頃盜賊が横行して頗る危険であつたので、其の邊の人は、皆避難するといふ状態であつたのに、全藏和尚、獨り晏如としてこゝに留まり、遂に其の豫言の如く大叫一聲して死んだといふ話なのである。白隱禪師は、此の傳を讀んで、また大に疑ひ、禪宗といふものも、また甚だつまらないと思つた。巖頭は、まことにこれ不世出の大宗師と言はるゝ人ではないか、此の人にしてなほ生きながら賊刃に罹つて死ぬといふ、こんなことでは、死後如何で三途の苦難を免れ得やう。こゝでつくづく自分の出家したことを今更ながら後悔をし、佛教といふものに、全然失望してしまつたのである。

これから後は詩文書などを習つて、其の名を成さうと思ひ、佛教のことは、夢にも思はずはぬ様になり、今までの一切の疑團も強ひて抑えて、翰墨の間に鬱悶を遣らうと努めた。が然し死後三途の苦みは、なほ時々念頭に燃えて、到底之を如何ともすることが出来なかつた。美濃の大垣の在に瑞雲馬翁といふ詩文家があつたので、そこに行つて

居つた時のことである。『壁生草』には斯う書いてある。

其頃一人、翁の門人にて温馬山とて名高き詩人あり。時に來りて予が詩の聯句を助く。常に百句の連句を端立て、山は章句を打し、余は對句、纔に線香二三炷にして終る。或時獨り閑かに熟らく、思念す、縱令詩の連句李杜に越ゆとも、死後争てか三途を免れ得んと、懊々として涙を含みて心樂しまず。其時閑に椽鼻を望み見れば、虫干の後、古き高き机の上に、二三百の書籍積み重れり。予一見し限りなく歡喜し、燒香誦經禮三拜、南無十方一切諸佛、一切護法の諸神祇、我が生涯に勵み勤めん道しあらば、只今授け給ひ玉へと祈誓しつゝ、目を閉ぢ、閑に行いて机の處に到り、手を指し展べて一卷を探り得たり。謹みて再三頂戴して之を見れば、貴ぶべし即ち禪關策進なり。歡喜に堪へず、之を披き覽れば、向きに所謂昔し慈明和尚が、汾陽に在りし日の刻苦の事なりき。

とある。汾陽の故事といふのは、『禪關策進』に、「引錐自刺」と題し

慈明、谷泉、瑯琊の三人、伴を結んで汾陽に參ず。時に河東苦だ寒し、衆人之を憚る。慈明、志、道にあり、曉夕怠らず、夜坐睡らんと欲すれば、錐を引いて自ら刺す、後汾陽に嗣ぎ、道風大に振ふ、西河の師子と號す。(谷泉は南嶽芭蕉の谷泉禪師、瑯琊は、瑯琊山の惠覺禪師で、共に汾陽の法嗣である。)

とある一段で、楚圓慈明和尚が、汾陽の善照禪師の下で刻苦奮勵、道を求むるに切なりし事實を擧げたのである。此の一事は餘程白隱の心を刺戟したものだと思はれるのである。

(五)

之ら以後の、細かいことは姑らく略して白隱、二十四歳の時のことである。越後の高田に英巖寺いふ寺がある、此の寺は、高田の殿様の菩提寺であつたといふ。こゝに性徹和尚といふ人が、「人天眼目」を提唱して居るといふことを聞いて、特にこゝへ

出かけて行つて、性徹和尚に逢つて、話しを聞いて見たが、一向豪い人の様にも思はれないので大に落膽をして、

巖頭和尚猶好在

これから寺の裏の方の、殿様の廟所の中に隠れて七日間といふものは、一人で、斷食をして、一生懸命に坐禪をしたのであるが、恰度七日目の夜中のことである、ゴーンと撞き出す遠山寺の鐘の聲が、殆んど巨鐘を耳の傍でゴーンと打ち鳴らされた様に感じ、忽然として、身心脱落の感あり、嘻しさの餘り、大聲で「岩頭老人猶好在」……「岩頭爺が居たぞ」と叫んだので、同じ眼目會に来て宿つて居た同寮の連中、此の聲を聞きつけて駈けて来て、始めて此の事を知つて相祝した。……全體此等の人々は、白隱が近頃居なくなつたので、多分一人で、國へでも還つてしまつたものだらうと言つて居たのである。白隱和尚は此の英巖寺の悟りを以て、自分の第一回目の悟り

であつたと言つて居るのであります。

さあこれからといふものが大變である。……「白隠自ら思へらく、三百年來の禪、我獨り之を得たり、六十餘州、誰か我に匹敵するものぞ」といふ勢で、和尚自分でも「此より慢心大にさし起り、一切の人を見ること土塊の如し」と書いて居られる位である。坐禪をするといふと、誰でも一度はかういふことがあるもので、之を甘く導いて行くのが師家の手腕である。之を導き損ふと、終には發狂にまでなつてしまふ、實に大事なところである。……此の時、此の眼目會に集まつて來たものは五百人も居つたといふが、餘り人数が多かつたために、三十人餘りは、隣りの寺の客殿を借りて宿つて居つた。白隠は、此の外宿の方であつたといふ。……或る日のこと、今新らしく來た信州の一人の和尚がある、身の長六尺もあらうといふ、大柱杖を挟んで、一くせありげの奴、此を白隠の寮に入れて洒掃でもさして、其の寮に置いてくれといふ話してある。同寮のもの七八人、皆大に弱つたがまあしかたがないといふことになつて、此の新到

の和尚を白隠の寮に入れることにした。……其の翌日、例の「人天眼目」の提唱終ると、外の寮の和尚どもが、此の「眼目」を取り出して、こゝはどうだ、あすこはかうだ、御前の所見はどう、自分の考はかうと、色々話しをしあつて、聽て還つて行つたのである。すると此の新到の和尚、白隠に尋ねて言ふには、「今こゝで色々話をして行つた連中は、あれでも皆一老子……寮長といふ様なもの……で御座ますか」と言ふから、「一老子だつたら、どうだい」とやると、「いや、外でも御座ませんが、今の話は、あすこはかうで、こゝはあア、あの和尚の言ふ所も一理なきにあらずだが、實は斯様」と「人天眼目」に就いて、一々指摘し始めたのみならず、言ふところ頗る分明であるから、白隠聽いて大に一驚を喫したのである。「さては、御前さんは一體何人ぞ」と聞くと、「私は、信州飯山の正受老人の弟子で、宗格といふものである」といふことから、漸々正受老人のこともわかる、これより白隠は宗格と互に商量して、大に得るところがあるといふことになり、遂に、白隠は宗格に頼んで、飯山に行つて、惠端和尚に

遭つて見たいといふ話になり、こゝで宗格に伴はれ飯山に行き、正受老人に面するこ
ととなつたのであります。此の時、正受は、臂をからげて、草でも取つて居たのであ
らう。宗格は、自分の仲間を連れて來たによつて會つてやつてくれと言つたので、こ
れから正受和尚は、白隠と會し、白隠はこゝに掛錫して、愈こゝで坐りこむといふこ
とに、先づきめたのである。

白隠和尚が始めて正受庵に行つた時のことである。先づ自分の所見を記して之を惠端
和尚に呈した、勿論英巖寺の裏山で悟つた、其の慢氣は十分鼻のさきには、ぶら下つて
居たに違ひない。

那箇是見得底

されば正受老人は之を見るより、之を左の手に握り、「這箇是汝學得底、」更に右の手を
展べて「那箇是汝見得底」とやられた。此の學得底と見得底がなかく、むづかしいと

ころなのである。さすがは惠端和尚である、忽ち白隠の慢氣を看破して、先づ此の慢
氣を打ち碎かうといふのである。然し白隠もまだ、鼻息は荒い、「若有見得底可呈
須吐却」……「ナニ、見得底！ そんな妙なものが若しあらば皆吐き出して御覽に入れ
ましようかい」と言ふと、「ゲ、ゲ、ゲ」と吐くまねをしたのである。……此奴なかな
か一筋縄で行かん奴である。或は老人は「狗子佛性作麼生」……これは例の趙州の「狗
子有佛性、也無」といふ有名な公案に就いて「趙州云無」といふ、此の狗子佛性の無
といふことを何と會したぞと問ふたのである。さうすると「手脚の着べきなし」……
「手も足もつけられません」所謂言語道斷、心行處滅である。ところが老人は、
手を伸べて、白隠の鼻頭を、グッと押して、「きつい手脚の着け様な」……「どうしてど
うしてなかく、しつかりつかまつてるぞや」……白隠は今、悟りに捕へられて居るの
である。さすがの白隠も此の時には流汗淋漓で、進むに進めず、退くに退けず、進退
維れ谷まつた、これからといふものは、愈真劍勝負で、やり出したので惠端和尚

はこゝで、叩いてく叩き潰す積りでかゝつたらしい。「下士は利に繼ぎ、中士は恩に繼ぎ、上士は宛に繼ぐ」といふことがあるが、汝は所謂熱罵瞋奉の宛に繼いだものだといはれた丈あつて、随分ひどく三十棒を加へたらしいのである。

穴藏佛法

正受老人は、此の後、白隠に對して言ふことは唯、一つであつた、即ち「穴藏佛法」といふ一語であつたといふことである。：「穴藏佛法」とは面白い言葉である。世の中には、自分一人悟つた積りか何かで、蝙蝠ではないけれども、自分のこしらへた悟りの穴藏に引つこんで、獨りで氣張つてる奴が随分ある。こんな奴を、太陽の光りの照る、廣い娑婆へ出すと、眼が眩んで、普通の人間一人前の仕事も出来ない、坊主をやめたら、明日から世に生きて行かれない奴が多いのである。喫茶喫飯皆禪といふ、所謂「平常心是道」の禪は、そんな不融通極まるものではない筈である。「穴藏佛法」とは、

死んだ佛法のことである。：白隠、入室する度に、何を言つても、正受老人一切受けつけない、唯「穴藏佛法め」と罵る丈のことである。しまへには、敷居をまたいで、座敷にはいらうとすると、未だ一語を發せざるに、「此の穴藏佛法め」を浴せかけられたのである。白隠も、ほとゝ之には困じ果てて、到頭大に決心をして、今度こそ是非とも、自分の所解を和尚に聞かしてやらうといふもので、和尚が何と言はうとも委細構はず、坐りこんで、いつかな退かず、やり出したので、終に組打となり、和尚の力や勝りけん、白隠遂に縁側から突き落され、汗みどろになつて、上り來り、禮拜すると、大喝一聲、「此の穴藏佛法め！」白隠も能くく失望したのである。惠端和尚は、自分の所解を見てくれぬと、怨んだでもありません。ア、自分は、到底見込が無いのか知らん、イヤ、日本の禪者何を獨り惠端和尚のみならんや。：白隠は遂に一旦正受菴を退出せんと決心したのである。一鐵鉢を手にして、茫然として正受菴を出て、飯山の市中を行乞をしながら

段々やつて来て、或る一軒の御婆さんの家の前に立ち止まつた。何を誦んで居つたか知らんが、兎に角口には「彈指圓成八萬門、刹那滅却阿鼻業」ぐらゐのことを言つて居つたのであらうが、心の内では、頻りに「趙州の無」か何かを考へて、殆んど夢中であります。そこで中の御婆さんは「通れ」とか「手が塞がつてる」とか言つてゐるらしいが、白隠自身の耳には、少しもはいらないので、唯むやみに、御經を誦んで居つたものであるから、婆さん非常に怒り出して、手に持つて居つた箒を振り上げ、笠の上から頭も割れよと打ち下したのである。「あッ」と一聲、白隠は其の場に打ち仆れ、氣絶をしてしまつたので、さア大變だといふので、かゝり合ひを恐れて引つ込む奴があり、中に二三人「どうした、〜」と言つて介抱してくれる。白隠「と眼を開くと同時に豁然として大悟した、歡喜の餘り手を拍つて呵々大笑したので、介抱をして居た人々は喫驚して「氣狂だ〜」と言つて去つてしまつたといふことである。これが白隠禪師が第二回の大悟だと言つて居られる所のものであります。

臨濟禪の方では、悟を何遍も開く。曹洞禪の方では、悟りは何遍もあるべきものではない、唯一度に限るといふのである。大慧宗杲は、現に「大悟十八遍、小悟其の數を知らず」と言つて居らるゝのである。こんなところも、洞濟二家の一つの相違點と見るべきものであらう。つまり本當の悟りといふものは、若し正當に言へば、そんなに何遍もあるべきものでは勿論あるまい、然し其の修行中に於て、進境の漸次新に見出されて行く上から言へば、大悟小悟、幾十遍あつたとて素より差支のあらう筈はないのである。…古來洞濟二家は非常に仲が悪かったので、臨濟では、曹洞を默照の枯禪と言つて斥けるかと思ふと、曹洞の方では、臨濟を階子悟などと言つて嘲るのである。白隠禪師の如きも盛んに默照枯坐の禪を排斥して居られるが、然しこれは、曹洞禪の弊を言はれたもので、曹洞禪其のものを根本から打ち破らうといふのではない。白隠和尚も、時々、洞宗の祖、道元禪師の語なども引用して、この外尊敬せられて居つた様に思はれるのである。唯默照禪を疾んだのは、坐禪をするものに、公案のやう

な何等の手がしりもないので、「思量箇不思量底、不思量底如何思量、非思量」といふ様なことを言ふから、機根の劣れるものは、已むを得ず、禪堂に漠然として坐り、終には居眠りでもするものが多かつたのである。否、白隠禪師の言によれば、當時の曹洞禪の方は、滔々として皆これであつたといふのである。これ白隠が、公案禪を唱へ、大悟小悟の階段を登る、臨濟禪の、却つて適切なることを説いた所以であらうと思ふ。それから臨濟禪では節死といふことを言ふ。今述べた、白隠和尚が一時氣絶したといふのは、あれは所謂節死である。此のあと、惠端和尚の下を去つて、諸國修行中にも、伊勢の鈴鹿峠を越える時、彼の「荷葉團々圓如鏡、菱角尖々利於錐」といふ句のことを思案をして居る間に、雨後泥濘の中で、峠の上の道の中央に、突然氣絶し、所謂節死したことがあると白隠禪師自ら書いて居るのである。此の時も旅客に氣をつけられたが、第三回目の悟りて、前の如く大に笑つたために、旅客は驚いて急ぎ去つたといふことである。

談少々横道にそれたが、白隠禪師は、二たび飯山の市中で大悟したので、喜んで更に正受庵に引き返して、また改めて其の領解を呈したところが、正受老人は非常に悦んで、直ちに之を印可し、こゝに始めて師資意氣相投じたわけである。

悟後の修

ところが老人が此の印可を與へた時に、如何にも丁寧親切に悟後の修行のことを訓誡して居られる、一寸之れを讀んで見るとかうである。

必ず誓つて小を得て足れりと爲すこと勿れ、此より勤めて悟後の修を修せよ。小を得て足れりと爲すは聲聞乘なり、如し爾、悟後の修を知らずんば、惜むべし小果の羅漢とならん。疥癩野干の身は受くべきも、二乗聲聞の類と成る莫れ、作麼生か是れ悟後の修、轉悟らば轉參せよ、轉了せば轉擧せよ、轉前後の重關あり、潜行密用、只だ相續するを主中の主となす。今時默照枯坐の族、盡く疥癩野干の身より

も劣れり。作麼生か是れ潜行密用。是れ深山岩崖樹下石上、默照枯坐をいふにはあらず。造次顛沛行住坐臥、片時も間斷なきものは是れなり。此の故に言ふ、動中の工夫は、靜中に勝ること百千萬倍すと。

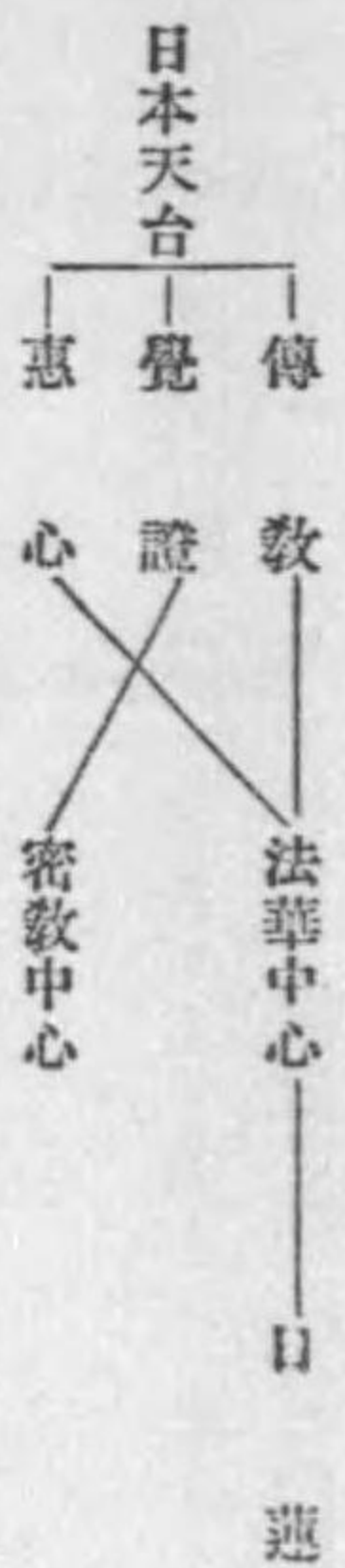
此の説明は、實に禪の骨髓を道破したものであつて、坐禪とは坐つてることだとのみ思つてゐる、死禪者流に取つての一大鐵槌である。所謂默照枯坐と斥けるのは此の死禪を言つたものである。道元禪師が、修證不二の禪を説いて居るのも、つまりは之に外ならのであつて、禪は生涯の修行である、生涯の修行、行々即ち悟りて、修行の外に、別に悟りのあらう筈がない。所謂造次顛沛、行住坐臥片時も間斷なき禪は、修證不二でなければならぬ。若し日常生活の外に、別に悟りなるものありと言はゞ、これ悟り地獄に落ちた奴で、即ち默照枯坐なるものである。悟後の修行といふことは、修證不二といふことである。潜行密用とは平常心是道といふことである、こゝに至つて、曹洞臨濟固より何の區別する所がない。

此の後と云へども、白隠禪師は、なほ諸方を歴參し、終りに故郷駿州に還り、松蔭寺を再興し、其の禪を弘め、幾多の俊才を打出し、明和五年八十四で入寂するまでの一々の傳は、最早こゝに言ふ必要はないのであります。

日蓮宗新進の學者として、當代第一流の清水龍山君が、僕の「日蓮上人」を讀んで送られた手紙の一節をこゝに出す。推稱は當らずであるが、意見の一致には少からず快感を覺ゆる。惠心については言ふべきこともあるが、こゝでは之を敢てしない。

日蓮論拜讀一指間然するところ無之詞意俱に明快透徹、轉た敬服と羨殺とに令不禁外、默然信受の體に御座候。教義の出發點を天台と東台兩密との指せられたる點、亦鐵案不可動。又其歸着點を法華中心の密教融會、換言すれば、事相有相門の密教々義を、三諦融即の法華の得分(特に假諦)とせられたるにて、之を史的に考證せられたるがかの「開目」「報恩」「撰時」等の諸鈔に見ゆる所謂、「善無畏不空が一行禪師を欺誑して天台の一念三千を偷盜せり云」に御座候。要するに聖祖の教義の史的逕路は日本天台、就中根本大師の法華中心の密教攝收、即ち法正密傍の立脚地より、彼の覺證以後の大日中心の法華融會の顛倒を彈斥し以て山家の古に復し、更に百尺竿頭一步を進めて其の迹門法

華經を本門法華經まで進展せしめ、以て彼の法然の「理深解微」「非機失時」の難破に正反敵對の破立を試みたるなり。此の破立は傳教尙ほ不可、況んや覺證をや。覺や證やは此れを試みんとして反て山家正依の法華經の高きをして卑きに就かしむる反對の結果を見たるこそ愍なれ。吾聖祖は台密なる清澄山に出家し、開宗以前は單に台密の所立を以て、彼の淨宗を破斥し給ひたること、彼の『戒體即身成佛義』の如し。予は本鈔より推斷して、同山を以て眞言宗と謂ふも、世人が思へる東密にあらずして台密なりと爲す所以也。斯くて聖祖の本門事實相の傾向を判ずる時



とするが愚意なり。然るに吾兄は日本天台は惠心までも一概して密教中心なりと爲して此れを非難せられたるも、それは一概に失せずや。
右詳細の高見を奉仰上候。先は高論拜讀讀餘の感想一言以て禮辭に代へ申候云

大正四年十月廿一日印刷
大正四年十月廿五日發行

定價金壹圓



著者 境野 高島大圓
發行所 高島大圓
印刷者 佐久間 衡治
印刷所 株式會社 秀英舍
東京市小石川區原町六番地
東京市京橋區西紺屋町廿七番地
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

發行所

東京市小石川區原町六番地
電話東京一五六八六
電話番町二六〇八

丙午出版社

大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正聖世の文教に貢献せむがために現代第一流の宗教家學者文藝家を煩はして『大正文庫』を發行し今や全部十二冊こゝに完成す外形は電車汽車中の繙讀に便に内容は處世修養の伴侶に好し——(全部完成)

- 第一編 明治思想小史 文學博士三宅雪嶺先生著(定價五十錢郵稅八錢)
- 第二編 此 一 筋 文學士沼波瓊音先生著(定價七十錢郵稅八錢)
- 第三編 來世の有無 新佛教徒同志會編(定價七十錢郵稅八錢)
- 第四編 禪の極致 大内青精先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第五編 予が婦人觀 黑岩周六先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第六編 狐禪狸詩 釋清潭先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第七編 噴・火口 高島米峰先生著(定價八十錢郵稅八錢)
- 第八編 ひとみの旅 杉村楚人冠先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第九編 書窓車窓 加藤咄堂先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第十編 人と超人 ショウ原著堺利彦先生譯(定價六十錢郵稅八錢)
- 第十一編 六十年 文學博士村上專精先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第十二編 沈黙の饒舌 内田魯庵先生著(定價八十錢郵稅八錢)

佛敎講義錄

僅に一ケ年で佛敎の大系が學び得られる 學界空前の佛敎講義錄出づ

佛敎がわからなくては日本の歴史の解釋が出来ない日本の文學も味ふことが出来ない日本文學の由來するところも知ることが出来ない従つて佛敎を知りたいといふ人は多いが唯讀三年俱舎八年では手もつけられないそこで隨にでも手取り易く佛敎の大系が飲み込めるやうにといふので現代有敎の學者に請ふてその専門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して杜撰な代作講義を掲載するが如きものと同一視するとなかれ

佛敎研究法	東洋大學敎授 島地大等	禪學要義	加藤咄堂
佛敎概論	曹洞大學敎授 加藤咄堂	歐米の佛敎	宗敎大學敎授 渡邊海旭
印度の佛敎	帝國大學敎授 荻原雲來	佛敎美術	帝國大學講師 中川忠順
支那の佛敎	東洋大學敎授 境野黃洋	宗敎學要義	眞言大學敎授 融道玄
日本の佛敎	豊山大學敎授 境野黃洋	基督敎綱要	慶應大學敎授 廣井辰太郎
佛典の解説	帝國大學講師 常盤大定	神道綱要	東洋大學敎授 足立栗園
法華經義釋	天台大學敎授 島地大等	其他臨時講義	を増加すべし

每月一回十五日發行	一冊菊判二百頁	滿一ケ年(十二冊)完結
購 費	一ケ月分	三ケ月分
東 修	六十錢	一圓五十錢
合 計	一圓十錢	二圓
	半年分	一ケ年分
	五十錢	一圓五十錢
	三圓五十錢	六圓

發行所 東京 小石川 原町六丁目 電話 八〇六

『萬朝報』記者 大住晴風先生著
現代思想講話

定價金 一圓廿錢
郵税金 八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳説を究め進んでゼムス、オイクン、ベルグソン等の如き現代思想を代表する大思想家の説くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遠なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

暮村隱士 久津見藤村先生著
現代八面鋒

定價金 八拾錢
郵税金 八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

暮村隱士 久津見藤村先生著
眞人僞人

定價金 壹圓
郵税金 八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か疇癢を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ僞人はこゝにその面皮を剥かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの概あり

堺 利彦先生著
樂天囚人

定價金 六拾錢
郵税金 六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文集
賣文社長 堺 利彦先生著

定價金 壹圓
郵税金 八錢

拳頭之節 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇抜痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 木下尚江君を評す 第二編 子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、墓地見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 喜劇 一、谷川の水 二、バード、シヨウ原作 第四編 告白 第三編 寒村 二、クレンクビニ、大杉榮 三、叛謀人 耶蘇、高島茶之

堺 利彦先生著
自傳赤裸の人

定價金 九拾錢
郵税金 八錢

佛國の革命はルソ一の『民約論』によりて點火せられ日本の教育界はルソ一の『エミール』によりて啓發せらる波瀾重疊神出鬼没の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彦先生なり一讀してルソ一前に立てるの感と起さしむ

カウツキー先生原著
堺 利彦先生譯
社會主義倫理學

定價金 壹圓
郵税金 八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道徳が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の味を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの日本人の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸徳秋水が最後の文章
基督抹殺論

定價金 七十錢
郵税金 八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に吟呻せるの間特に此一巻を著す所論痛絶快絶行文悲絶絶倫嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を扶殺したとせむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天の憎讀を震ふ

最新論理學

文學士 渡邊又次郎先生著
定價金一圓廿錢
郵稅拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ巻末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

筆と舌

加藤咄堂先生著
定價金七十錢
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演説と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

亂れ雲

村上博士序
藤井瑞枝女史著
定價金八十錢
郵稅金八錢

女史は跡見花隠先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宣正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁諷刺教訓皮肉或は鋭き觀察或は隱れたる温情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

新氣運

「無我愛」唱者
伊藤證信先生著
定價金八十錢
郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の罵詈訕笑輕侮憎惡の中に立ち眩面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

廣長舌

三宅雪嶺先生序
高島米峯先生著
定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峯今胸中鬱勃の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々當世の大文字」と

惡戰

加藤弘之先生序
高島米峯先生著
定價金八十錢
郵稅金八錢

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

理想的商業

島田三郎先生序
高島米峯先生著
定價金二十五錢
郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人尻を垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を説きこの道を教へ以てお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものば即ちこの書なり

修養史譚

前外務大臣 伯爵 林董閣下序
東北大學 學總長 澤柳政太郎先生序
櫻井 千河岸貫一先生著
定價金壹圓
郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を繕くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

前外務大臣 伯爵
林 董閣下纂譯
修養の模範
定價金七拾錢
郵税金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美談の乏しいのに窮り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を翻譯摘録して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

文學博士 村上專精先生著
俗修養論
定價金壹圓
郵税金八錢

古聖實踐の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を説明し苟も模範とするに足るべき善行美譚は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精刻完備の修養書たらむなり

文學博士 村上專精先生著
改訂自 **信錄**
定價金六拾錢
郵税金八錢

これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり言々巳の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著
誠のしるべ
定價金四拾錢
郵税金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著
女性訓
定價金四十錢
郵税金六錢

本書の内容は天職中庸質素謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を摸み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

スタンフオールド大學總長
ジョルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ
中村 平先生譯
人物の修養
定價金五十錢
郵税金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く「ジョルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらる紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ること依て利すること尠からざるは言を待たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

ウキリヤム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補
處世 **自己測量**
定價金五十錢
郵税金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡徳邪僻の鞭朴人格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道德の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年等がこの生活難の世に處して新しき運命の祕庫を開くべき鍵はこゝにあり

黒岩周六先生講演
人生問題
定價金七拾錢
郵税金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に達着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て茲に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と満足と活力とを得て温く且つ光ある人生に觸着することを得ん

東北大學總長
澤柳政太郎先生著
退耕錄
定價金壹圓
郵税金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尚ほ腹ふくむ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歴上百餘の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣憤あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる構案あり言はんと欲する所は言ひ盡くし現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

フエヒネル先生原著
文學士 平田元吉先生譯
死後の生活
定價金五拾錢
郵税金八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豊富なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず

杉村縱横先生譯編
強肺病全快談
定價金九十錢
郵税金八錢

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を繕いて天來の福音に接せよ

文學博士 井上圓了先生著
南半球五萬哩
定價金九十錢
郵税金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十錦上更に花を添ふ

文學博士 井上圓了先生著
活佛教
定價金壹圓拾錢
郵税金八錢

明治の宗教界思想界を震駭せしめたりし「佛教活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛教をして活佛教たらしむるの福音

帝國大學教授
文學博士 高楠順次郎先生著
國民と宗教
定價金七十錢
郵税金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳説せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演説講話の好模範たるべし◎附録として研究上修養上極めて重要な論文數種を收む悉く學界の珍

文學博士 松本文三郎先生著
文學士 羽溪了諦先生著
釋尊の研究
定價金壹圓
郵税金八錢

本書筆を釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠誠に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

京都帝國大學文部科大學長
文學博士 松本文三郎先生著
彌勒淨土論
定價金壹圓
郵税金八錢

宗教學上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも他の半面は「彌勒淨土」の埋没によりて全然暗黒に歸すこれ豈佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大恨事ならずか松本博士多年の蘊蓄を傾けその專攻する學科の立脚地より一彌勒淨土の由來淵源を詳論し博士の舊著「極樂淨土論」と相俟つて茲に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛敎の淨土思想を談せんとするものぞ

ボール、ケラス先生著
 學習院教授鈴木大拙先生譯
阿彌陀佛
 定價金三十五錢
 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たることや弊社曩に十年博士と居を同しうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に問ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
 文學士 常盤大定先生著
釋迦牟尼傳
 定價金七十錢
 郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生著
孔子傳
 定價金壹圓四十錢
 郵税金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて銳利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
 直理章三郎先生著
王陽明
 定價金一圓五十錢
 郵税金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師
 境野黃洋先生著
補聖德太子傳
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

大内侍侍先生序
 高島米峰先生著
一休和尚傳
 定價金九十錢
 郵税金八錢

元日に觸體を振廻はして人の度臆を抜き末期に養を諦つて梵天に捧けた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一簑笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授
 忽滑谷快天先生著
達磨と陽明
 定價金壹圓拾錢
 郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を密開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道徳の指導者たり

明楊起元評註
 加藤咄堂先生和譯
和譯維摩經評註
 定價金七十錢
 郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著
原人論講話
定價金六十錢
郵税金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の巔然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ髓頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤咄堂先生著
通俗講話の理方法
定價金九十錢
郵税金八錢

通俗教育の必要日に通りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豊富なる経験とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聴者を感動せしめ得べきかの理論と方法を極めて親切に解説し多くの例話を擧げてその使用法を示されたものなれば教化の秘訣雄辯の奥義講話の資料收めて一卷の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を精かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
清澤先生著
寒山詩新釋
定價金五十錢
郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
清澤先生著
和漢名詩新釋
定價金五十錢
郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉り和は虎關以後絶海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此くの如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
忽清谷快天先生評釋
和名士參禪集
定價金壹圓
郵税金六錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黄山谷蘇東坡白樂天張無盡斐休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の錯綜に接するを得しむ

マクス、ミュラー博士原著
文學士 清水友次郎先生譯
宗教學綱要
定價金五十五錢
郵税金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マックス、ミュラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦女の宗教學書としては唯一無二の長書なり

第三高等學校教授
文學士 野村直太郎先生著
宗教と倫理
定價金五十錢
郵税金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に悩める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗教論を評す

眞宗補教 北條蓮慈先生著
眞宗の教義
定價金十二圓
郵税金十二錢

ア、エフ、ステンツラー先生原著
エル、ピツシエル先生増訂
ドクトル、フイロソフイェー
萩原雲來先生譯補
梵語入門
定價金壹圓
郵税金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は成な歐語の梵文典を使用すされど
歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學はざる可からざる不便あり第二價格
低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむ
がために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は
僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

文學博士高楠順次郎先生開
曹洞宗大學教授
立花俊道先生著
巴利語文典
定價金壹圓
郵税金八錢

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下において巴利語を修むること
と多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる
巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には
多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に従ひたれば
初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべ
し

慈雲尊者眞筆
高楠順次郎先生序
阿彌得壽先生著
悉曇阿彌陀經
定價金壹圓
郵税金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘
經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡ばんが爲なり梵文に加ふるに
漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂
正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺
ふに易からん

平子鐸嶺先生遺著
補校法上宮聖德證註
正價金一圓
郵税金八錢

「上宮聖德法王帝説」はその記事切實その文詞醇古多く寧樂已往の記録を
取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須
みず而して狩谷掖齋先生の「證註」に至つては詳説を折衷し正説を辨別して
先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多
少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽強記にして史
眼犀利徹齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足ら
ざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士村上專精先生編
科註原人論
定價金十二錢 郵税金二錢
科註大乘起信論
定價金十六錢 郵税金二錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置
きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

高島米峰先生著
學生參考
東洋史
定價金十三錢
郵税金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべか
らむも學生を養くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑
はざるなり」と

文學博士 三宅雪嶺先生著
增訂 **偉人の跡**
定價金壹圓
郵税金八錢

古今東西の偉人数十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を
明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面
目は隠如として茲に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にし
て修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せし
か社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉
著に問へ

文學博士 三宅雪嶺先生著
小泡十種
定價金四十五錢
郵税金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あ
り今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を
語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩渺盡きざる大河となり散
じては續紛限りなき飛沫となる小泡か激濤か蓋し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著

明治思想小史

定價金五十錢
郵税金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高峰に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして劃切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の産物なりしかを知らずして依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

文學士 沼波瓊音先生著

此筋

定價金七十錢
郵税金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはソクソクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうなる方にのみ、これを備む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがらるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

新佛教徒同志會編

來世之有無

定價金七十錢
郵税金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するのかわ減しないのか元來吾等に靈魂などいふものがあるのか無いか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを満載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著

現代青年論

定價金十五錢
郵税金二錢

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるもの、筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し
一、青年の力
二、今の青年は依頼心が強い
三、今の青年には氣概がない
四、今の青年は成功を急ぐ
五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する
六、今の青年は思想が羸弱である
七、今の青年は信仰が乏しい
八、今の青年は同情が乏しい

大内青巒先生著
結城素明書伯書

禪の極致

定價金六十錢
郵税金八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ることは能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ。古來禪を説くもの、徒に難解の語句を弄して、人を愚く出で、愈々迷はしむることを。大内先生學深く徳高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を説き、深遠の法を語ることに、殆ど天下獨歩、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附録「五位顯講話」また先生獨創の見識を以て、縱横に講解す、蓋近來の大文字なり

黒岩周六先生著

予が婦人觀

定價金六十錢
郵税金八錢

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黒岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々様々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

釋 清潭先生著

狐禪狸詩

定價金六十錢
郵税金八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠狸詩の窟一蹶して之を壊る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

中原鄧州老師著
大石正巳居士序 飯田權隱居士跋

南天棒禪話

定價金一圓廿錢
郵税金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈教懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縱横に説き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり人若し南天の痛棒亂下し來るの間に立ちて平然としてこれを喫了し得ば則ち人間の大事こゝに成るべし冀くばまづ聊かこれを試みよ

釋清潭先生主筆
月刊漢詩
一年分五十錢

釋清潭先生を中心とする漢詩園淡社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す
別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著
晚晴樓文鈔
定價金八十五錢
郵税金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり説あり辨あり序あり記あり碑あり書あり賛銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを愛ふるを須むざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然巻を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す綠陰深處にこれを繕かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序
高島米峯先生著
噴火口
定價金八十錢
郵税金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著「廣長舌」「惡戰」等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士村上專精先生主筆
月刊人道講話
一冊七錢五厘
一年分八十二錢

「人道講話」は村上先生の人道講話を連載する者
「人道講話」は教育と宗教と道德との三面を有す
「人道講話」は精神の涵養を以て教育の本領とす
「人道講話」は人道の實踐を以て宗教の要務とす
「人道講話」は父母の孝養を以て道德の大本とす

記者松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊藝文
一冊廿二錢
半年分一圓廿錢
一年分二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
「藝文」は東西兩洋の學術文藝に對し最嚴深遠の批判を下さむとする者也
「藝文」は關西思想界の中心として兼て關東の思想界を風靡せむとする者也

「東京朝日」記者
杉村楚人冠先生著
ひとみの旅
定價金六十錢
郵税金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、専ら現代を寫し、人間を論ず。曾て、洛陽の紙價を貴からしめたる「大英遊記」以來の名文にして、又曾て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる「七花八裂」以來の奇著なり。

加藤咄堂先生著
書窓車窓
定價金六十錢
郵税金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地籟あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の德澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出でては車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

學習院教授鈴木大拙先生著
帝國大學講師鈴木大拙先生著
スエデンボルグ
定價金五十錢
郵税金八錢

神學界の革命家、天界地獄の通歴者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身を集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を愛ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此著成る所以。

文學博士 村上專精先生著
六十年
 定價金九十錢
 郵税金八錢

これ村上博士が過去六十年間苦悶の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て龜鑑とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

文學博士 松本文三郎先生著
佛典の研究
 定價金九十錢
 郵税金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに饒近齋焯その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先哲未到の新説なりとす佛典の眞偽を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

久津見 巖村先生著
ニイチエ
 定價金九十錢
 郵税金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士 松本文三郎先生著
増補 宗教と哲學
 定價金七十錢
 郵税金八錢

本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を説きしか」に起し「宗教と道德」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを説明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

東洋大學教授 土屋鳳洲先生編
評解 唐宋八家文鈔
 定價金四十五錢
 郵税金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな巻帙浩瀚初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これ遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師 鈴木大拙先生著
禪の第一義
 定價金一圓
 郵税金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特産なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりに拈弄せられ活きたる人生と殆ど没交渉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を説述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實際の歷程を精叙しその所得の公案を解説し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除く去せむとす不立文字教外別傳の禪も本書出てゝその近代色彩の頗る鮮なるものあるを看取し得む

内田魯庵先生著
沈黙の饒舌
 定價金八十錢
 郵税金八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈黙の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を説き生活の難易を教ふその言の懇切なるその論を穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄哉と言はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの

スエデンボルグ著
新エルサレム
 定價金六十錢
 郵税金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教説にして救済には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著

人
と
超
人

文藝博士 井上圓了先生著
定價金九十錢
郵税金八錢

シロウ熱全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼れの生命哲學彼の兩性觀彼の皮肉彼の風刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り
譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、シロウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敦で見た人と超人(松居松葉)等あり

おばけの正體

文學博士 井上圓了先生著
定價金五十錢
郵税金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者怪しい者怪しい者怪れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の真相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聴きたがる小供のためにも「幽霊の正體見たり枯尾花」など、悟つたつもの大人のためにも趣味と實益とを興へること多大である

青
巒
禪
話

東洋大專長 大内青巒先生著
定價金壹圓廿錢
郵税金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう澤山なりそれ以上廣告文でコケを成す必要いづこにかあるしかも試みに一二首を加ふれば平談以て微妙の法門を説破し俗語以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の秘奥を探り人心の機微に觸る迷悟凡塵の如きたゞ讀者の標ぶところに委するのみ

印度哲學宗教史

文學博士 高楠順次郎先生共著
文學士 木村泰賢先生著
定價金貳圓
郵税金八錢

本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を增補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むるところ吠陀、梵書、奧義書、經書及び諸學派の開展に涉り洵にこれ印度の根本思想を説述して盡さざるなきもの荷も世界無比の寶庫と稱せらるる印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの秘庫を擁らざるべからざる也

修
道
禪
話

新井石禪老師著
定價金一圓
郵税金八錢

新井石禪老師は學に於て德に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に満足し邪禪に墮在するもの尠からざるを見て慈心到底默止するに堪へず茲に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不説の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始めて了了明

神
智
と
神
愛

學習院教授 鈴木大拙先生譯
帝國大學講師
定價金一圓半錢
郵税金十二錢

本書は天界地獄の通歴者として學者宗教家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より説き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹譯筆明快

店
頭
禪

高島米峯先生著
定價金八十錢
郵税金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也
學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鶻聲堂の帳場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也
傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實驗也信仰の告白也

禪
の
面
目

建仁寺派管長 竹田默雷老師著
定價金一圓
郵税金八錢

語も亦雷の如く默も亦雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絶版せる『默雷禪話』三卷數百則中より奇峭の論と懇到の説とを選びて百五十則を獲たりこれ世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

文學高楠順次郎先生閱 帝國大學講師 文藝學士 木村泰賢先生著

印度六派哲學

定價二圓三十錢 郵稅十二錢

六派哲學(數論、瑜伽論、勝論、正理論、ミーマーンサー、ギーダーンタ)は印度哲學の代表的思潮にして一元論二元論多元論の争汎神論有神論無神論の別機械論目的論虛無論の主張等一としてこの中に含まれざるはなく又これを學科の性質より見れば物理學論理學純正哲學宗教哲學實際哲學等悉くこれを網羅せざると言ふとなし宜哉歐米の學界單に印度哲學とし言へば直に以て六派哲學を意味するが如き狀あることや然るに我國未だ嘗てこれに關して權威ある著述の發表せられたるを聞かず眞に學界の一大耻辱なりとす木村先生夙にこれを慨し研究多年漸くその完成を告ぐるや更に東京帝國大學に於てこれを講ずること一學年その間又多少の補訂を加へて遂に汎くこれを世に問ふに至れりしなり時恰もタゴールによつて今更の如く印度思想の雄大深遠なるに驚嘆する者多き貧弱なる我國の思想界に向ひ本書の如き先人未到の研究にして斯學最高の權威たるべき名著を推薦するを得たるは實に弊社の誇たるのみならず也

スエデンボルグ著 帝國大學講師 學習院教授 鈴木大拙先生譯

神慮論

定價二圓卅錢 郵稅十二錢

『神慮論』はスエデンボルグが玄奧神祕なる宗教を知るべき一大著述なり『天界と地獄』は現世と離れて離れざる心界を描出し『神智と神愛』は絕對無限性の神徳を説破し而して『神慮論』は實に此の神徳が萬物の上に現はるゝ所以を詳述したるものにして天界地獄の遍歴者神祕界の大王神學界の革命家たるス氏の所説を知らむと欲する者は本書を讀め

東京 小石川 原町六 鷄聲堂 出版 丙午 版社 東 京 小 石 川 原 町 六 鷄 聲 堂

325
317

終

